



だっ広い講堂のような部屋。三面は壁だが、一面は窓。朝の時間が早いのか、日差しは、窓ガラスから斜に差し込み、部屋を中心部まで伸びている。窓と反対側の壁には、顔だけが映る鏡が張り付けてある。その鏡の前に一脚の椅子が置いてある。鏡の壁の右側の壁には時計が掛けてある。時計の針は七時を差している。

部屋には誰もいない。ガラガラガラ。時計の壁と反対側の壁のドアが開いた。何者かが立っている。誰だ？女か？男か？その誰かがゆっくりと歩いてきて、部屋真ん中まで進んだ。

ペタン。ペタン。ペタン。スリッパの音がする。スリッパは、足に比べて少し大きいのか、かかとがワニの口のようにあくびをしている。

一人芝居の主役は、舞台の中央に立つと、一度、窓の外に咲いている花を一瞥し、鏡のある壁に向かって進んだ。一步。一步。また、一步。ペタン。ペタン。ペタン。

鏡の前に立った主人公。鏡にはお腹が写っている。主人公は椅子に座った。鏡に顔が映った。年齢は若い。まだ、二十代だ。

あたしは美しくなりたかった。本当に、美しくなりたかった。そのためには、命を掛けてもいい。だから、美しくなるための栄養分を摂取したかった。その栄養分は、食べ物だけではない。化粧品も服も花もアクセサリも、全てがあたしの栄養素なのだ。

栄養素は私以外の物であり、私自身の中の物。私以外の物が美であり、私自身も美なのだ。そして、私以外の物が醜であり、私自身も醜。混在する美と醜。並列する醜と美。そして、いつでも変換可能な美と醜。その意味では、美と醜は姉妹の関係。いや、親子の関係か。親しいが反発し合う。そむけ合うが仲睦まじい。

主人公は鏡をずっと魅入っていた。

一 幼女

あたしのまいにちは、ばななをたべたり、あめをなめたり、はなからくうきをすったり、くちからいきをはいたり、みずをのんだり、ぼけっとなしたり、かみにはなをかざしたり、おにくをたべたり、よぶんなおにくをおとしたりしています。よぶんなおにくをおとしておなかですいたら、ときには、ひとをくったりもしています。

もちろん、ほんとうに、ひとをくったりなんかはしません。にんにくはたべても、じんにくはたべないしゆぎなのです。こういうはつげんじたいが、ひとをくうことよ、とおかあさんからおこられました。

あたしは、いきるため、うつくしくなるため、あらゆるものくいつくしたい。ときには、つけく

わえたり、ときには、そぎおとしたり、ときには、あるがままに。それが、びゅーていふる ふ
あいた一のいきかただとおもいます。

あたし、きれい？

二 ルームランナーで走る女

ハッハッ。フッフッ。ハッハッ。フッフッ。ハッハッ。フッフッ。

真子の息が荒い。だが、息は的確にリズムを踏んでいる。

いち、に、さん、し。いち、に、さん、し、のリズムだ。

額から汗が流れる。脇の下にも、足の付け根にも、背中の腰の部分にも汗がにじむ。走っている
のだから、体全体から汗が出ても当たり前なのだが、汗が大量に出るのは不思議といつも場所が
決まっている。

首に巻いたタオルで顔を拭く。運動を続けていれば、どうせ汗が噴き出してくるのだから、終わ
ってからでもいいのかもしれないが、真子は、何故か、顔に汗を搔くのはいやだった。何か、気
持ちは悪い。だったら、運動もやめればいいのだが、運動をやめると気持ちは悪い。どちらの気
持ちは悪いかを、心のやじろべえで測ってみると、運動をやめると気持ちは悪い方に傾く。だ
から、ルームランナーの上ではつかねずみに負けまいと走り、顔に汗が流れ出たらタオルで拭く
。おかげで、心のやじろべえはどちらにも傾かない。平行のままだ。

真子は顔を拭き終わり、タオルを再び首に巻いた。ふと、顔を上げると、左方向に、見たことの
ないおじさんが台の上に立っていた。片手を上げた。ピストルだ。

真子は、ルームランナーから、マラソン大会にワープしたのだ。周りには急に人、人、人が集ま
ってくる。もう、スタート時間なのか。おじいさんやおばあさんを始め、若い男に若い女、高校
生や中学生、小学生もいる。真子の前にどんどんと人が並んで行く。真子は、後ろ、後ろへと
下がっていく。選手の数が急激に膨れ上がる。だんご状態か、砂粒状態かわからないけれど、そ
の中に、真子がいる。満員電車ならぬ、万人ランナー。

ポン。ピストル音が鳴った。しけた音だ。火薬が湿っていたのか。先頭の選手は走り出したよう
だが、真子の周りのランナーは一步も動かない。真子がいる位置は、スタートラインからかなり
後ろだ。理論上は、同じスピードで、同時に動き出せば、前に進むことができるはずだが、実
際は、人それぞれの反応の仕方は異なるため、同時スタートにはならない。

出番を待ちかねて、その場で、ジョギングする人、談笑する人、顔やふとももを手のひらで叩き
、気合を入れている人。皆、様々だ。

体がひつつきすぎて、目の前の選手の頭部しか見えなかったけれど、次第に、首、背中、お尻、
ふともものや膝の裏、カラフルなシューズが露わになっていく。

ようやく、真子の出番だ。右足を一步踏み出す。左足も、だ。真子の後ろにもランナーがいる。
今度は、真子の後頭部、やや猫背の背中、少し下がり気味の臀部、太目で、短い脚が、後ろから
見つめられることになる。

普段の生活では、自分の後ろ姿なんか他人にどう見られようと気にしないけれど、ランニング大

会になると違う。後ろ姿だけで、そのランナー実力がわかるからだ。

少しでも実力以上に自分を見せたい。もっと、美しく走らなければ、もっとスピードを上げなければ。加速する体。それに比例して、額に皺がよる。鼻の穴が最大限に広がる。だが、これまでだ。鼻呼吸から口呼吸への転換。口が大きく開く。隣のランナーの吸う空気までも奪い取ろうとする呼吸。息が荒い。声を出していないのに、喉から口に掛けて大きな音が鳴る。洞窟の中の風のような。

どんなに息を吸っても、どんなに息を吐いても、肺は苦しみのうめき声しかあげない。酸素が足りない。酸素が足りないのだ。そのうちに、今度は、体中の筋肉が悲鳴をあげた。スピードの継続を拒否するストライキだ。もたない。体全体がもたない。距離表示は、まだ、わずか一キロだ。このままでは、残り四十一、一九五キロを走りきれない。もし、走り終えることができれば、美になれるのか。それとも、醜となるのか。

真子は、自分の意識が遠くなっていると感じた。

三 バナナを食べる女

「ここはどこ？」

女は眩いた。まるで見知らぬ場所だ。思い出そうとしたが、思い出せない。それは当たり前だ。かつて、来たことはなかったからだ。だが、その保証もない。ひょっとしたら、来たことがあるのかも知れなかった。だが、そんなことはどうでもいい。

女はぼんやりと庭を眺めていた。最初に目覚めた時に、見えたのがその庭であった。鳥は、卵から生まれた時に、最初に動くものを母親と思い込むという。それならば、女にとって、中庭が母親なのかもしれない。母に会いたい。女は立ち上がろうとした。その時だ。

「食べる？」

突然突き出された言葉とバナナ。女はその声の先とバナナの先を見た。手首、二の腕、肘、肩、そして顔だった。顔には覚えがない。だけど、女にバナナを差し出している。こんな親切な人はいない。友だちなのか。だが、女がここに来てから、友人と呼べるような人はいない。それなら、身内なのか。その人は、どこから来たのだ。

女は中庭を見ていたはずだ。それなら、中庭から来たのか。中庭は、お母さんだ。それなら、目の前の人はお母さんになる。そう、お母さんなのだ。いいや、お母さんに違いない。お母さんであって欲しい。

「お母さん。お母さん」

女が叫び続けると、見知らぬ女は目の前から消えた。一人残された女。バナナを手を持つ。一枚、二枚、三枚、四枚と黄色い皮をむく。中から、薄い黄色のお母さんの化身が現れた。口を寄せる。ひと口噛む。ガブリ。お母さんの頭が口の中に転がり込む。

ぐちゃぐちゃぐちゃ。お母さんの頭がつぶれた。でも、大丈夫。お母さんの頭は、女がいつまでもお母さんのことを忘れないように、女の脳の中に吸収されたのだ。

二口目をガブリ。お母さんのおっぱいが口の中に溶ける。でも、大丈夫。お母さんのおっぱいは

、女のおっぱいの裾野に広がった。もう、垂れ下がることはない。

三口目をガブリ。お母さんのお尻が口の中で弾ける。でも、大丈夫。お母さんのお尻の膨らみは、女のお尻の先端で、女が、もし、尻もちをついた時に、女を守ってくれるのだ。感謝、感謝。

四口目をガブリ。お母さんの脚が口の中で折り畳まれる。でも、大丈夫。お母さんの脚は、口の中で、きちんと正座をしてくれた。あんまり長い間、狭い口の中にいるとしびれてしまうだろうから、女は四口目のバナナを飲み込んだ。

後に残されたのは、バナナの皮だけ。女はお母さんをすっかり飲み込んでしまった。お母さんを食べた女は、女が二つになった以上、お母さんの分も一緒にきれいになれるはずだと信じた。

四 唇を愛する女

舌を突き出す。空気に触れる。上唇を舐める。右から左に。左から右に。乾いた唇に湿り気が甦る。この地球上に水が生まれ、水玉が割れ、何かが産声を上げた時のように。

舌は蛇となり、ナメクジに変化し、カタツムリとなって、下唇を散歩する。自らが水を巻き、自らの道を切り開く。右から左へ。左から右へと。昭和神山のように、唇を突き出した舌は、ちよろちよろと空気の水分を吸いつくしていく。舌尖だけに、雲が集まり、海が流れ込み。氷が溶けた。

あたしは、あたしの全てが嫌いであった。額も、眉も、眼も、鼻も、顎も、髪の毛も、全てに嫌悪していた。ただし、唯一、あたしが気にしているのが唇だった。いや、本当は、唇も嫌いなかもしれない。ただ、他の器官に比して、嫌いさが少しましなだけなのかもしれない。でも、まし、じゃいやだ。好きじゃなきや、いやだ。好きでも、十分じゃない。それじゃあ、大好き。それは、ありふれた言葉。じゃあ、何？どんな言葉がいいの？お気に入り？

まい ふえいばりっと まうす。

あたしは、もう一度、鏡を見る。鏡の中では、唇だけが赤い月のように輝き、クレーターがうさぎを囲い込んでいる。それ以外の、額も、眼も、眉毛も、鼻も、宇宙の暗闇に塗り込まれたのか、ブラックホールに吸収されたのか、全く見えない。

そう、人は、見たくないものは見えないのだ。あたしには、あたしが一番大好きな唇とそれを愛する舌しか見えない。だが、不思議な事に、あたしの眼は、わざと、唇と舌から目をそらし、眼を宇宙がビッグバンした時と同じように、暗闇の中に真実を求めようとする。あたしの存在が不確かなのか。いいや、あたしは、あたしである。完全成立不完全成立。その両方が、あたしであり、その両方が、あたしではない。

唇が、舌が、動き出し、鏡の世界から飛び出した。もう、帰り道はないよ。行き先しかないよ。だから、だから、唇よ、舌よ、鏡の中から出るんじゃない。

あたしは、必死の形相で、鏡から唇がはみ出し、出て行こうとするのを防いだ。だが、唇は飛び出た。この瞬間。あたしは、びゅーていふるに負けたのだった。いや、びゅーていふるに勝ったのかもしれない。びゅーていふるは、もういない。

五 座禅の女

「飛んで行け。飛んで行け」

洋子は眼を閉ざしたまま念ずる。

「飛んで行け、飛んで行け。思考よ、体よ、感情よ、血しぶきよ、全てよ、飛んで行け」

目に力を入れれば、入れるほど、遙か彼方に飛んで行けるような気がした。もっと、もっと、力を入れるんだ。

洋子は、眼を瞑ったまま、顔をこわばらせ、鼻の穴を閉じんばかりに力を入れ、歯を食い縛り、特に、奥歯に、一本足打法、そう、一本足打法でバットを振り回す瞬間と同様に、力を込める。奥歯と奥歯ががっちゃんこ。がちんこの戦い。

ううむ。そう、うむむ。うむむは、有無無になる。なんて、哲学的な言葉だ。有るにも関わらず、無が二回も続くなんて。やはり、無なのか。

洋子の体は座ったままだが、心だけは空中に浮揚している。特段、変わったことをしている訳ではない。新興宗教を始めるための、パフォーマンスを行っているのでもない。心を自由にしているだけである。心だけなら、日本中、世界中、いや、宇宙にだって行ける。この自由さが、人を美しくさせるのだ。

「あたしは、飛ぶ。どこまでも、どこまでも、飛ぶのだ」

洋子は、足のしびれと戦いながら、心の自由を、心の美を得ようとしている。

「そう、私は、びゅーていふる・ふぁいた一なのだ」

洋子は、足がしびれて、立ち上がることができなくなっていた。

六 娘の命日に他人に花を渡す女 から 十 ちゅうちゅうする女 まで

六 娘の命日に他人に花を渡す女

「どうぞ、これ」

そう言って、女は、カーネーションを一本、病院の診察室の前の待ち合い所の椅子に座っている中年女性に差し出した。

突きだされた花に、とまどう女性。

「今日は、交通事故で死んだ娘の命日なんです。どうか、あの娘のために、祈ってあげてください」

女の必死な形相に、女性は、相手の勢いに負け、花の茎に手を伸ばした。女は、相手が花を受け取ったのを確認すると、にこっと笑みを浮かべ、その隣に座っている老婆の前にも佇んだ。

「どうぞ、これ」

女は、先ほどと同じセリフを繰り返した。女の胸には、ひと抱えもある花束があった。だが、老女は、何の反応もしない。眼は見開いたままだが、何を見ているのか、どこの方向を向いているのかわからない。しかし、手だけは差し出し、女の花を受け取った。老婆のゲームセンターのアームは花をしっかりと掴んだまま、元の位置に戻った。だが、指が開くことはない。

女は、自分の好意が通じたことに満足したのか、笑みを浮かべ、他の人の所へ向かう。

「花はいりませんか。花はいりませんか。今日は、娘の命日なんです。娘のために、一緒に、祈ってくれませんか」

女は周囲を見渡す。もう、誰もいない。いや、元々、誰もいなかったのだ。鏡に映る自分の姿を、中年女性や老婆に見立てていただけであった。

診察室も待ち合い所も消えた。手に持っていた花さえも幻影であった。

立ち尽くす女。だが、女の笑顔は真実であった。その笑顔は美しかった。その美しさも真実であった。それでは、娘の命日も幻影なのか。それは分からない。

幻影の中で、「花はいりませんか、花はいりませんか、娘の命日なんです。一緒に、祈ってくれませんか」という女の声だけが、現実の声として、部屋に響き渡った。

七 シャドウボクシングの女

ストレート、ストレート。フック、フック。アッパー、アッパー。

鏡の前で、パンチを繰り返すあたし。パンチを繰り返す度に、汗が玉となって、吹き飛び、床面を濡らす。

汗はあたしの体のひとつだ。分身だ。あたしの心と体の一部だ。そのあたしの分身が飛び散る。汗が飛び散ることで、自分が更に大きくなっていく。あたしの領土が増える。それが、満足感なのか。

ハッ、ハッ。ハッ、ハッ。

再び、ストレート、ストレート。フック、フック。アッパー、アッパー。

顔がゆがむ。ゆがんだ顔は美しい。これこそが美だ。ビューティフル・ファイターだ。

眉間に皺がより、眼は細くなり、鼻腔が広がり、奥歯を噛みしめる。顎は鋭角になる。他人には苦痛に見える顔でも、本人にとっては美の象徴だ。内面から溢れだした生の歓喜が、顔に溢れているのだ。なんて、美しいんだ。

あたしは、まだ、引き続き、

ストレート、ストレート。フック、フック。アッパー、アッパーを繰り返す。

あたしの生きる鼓動が全て吐き出された時、頭の中が真っ白になった。その途端、あたしはその場に崩れ落ちた。

あたしの額に汗が滲んでいるものの、眉は垂れ、眼は閉じられ、鼻からはゆっくりと酸素に溢れた空気が吸い込まれ、だらりと開いた口からは、二酸化炭素に包まれた空気が吐き出される。

あたしの顔は、魂が抜けきっているが、幸せには包まれている。

八 サングラスの女

「色眼鏡大好き。色眼鏡大好き」

玲子はサングラスが好きだ。メガネじゃない。サングラスだ。だからと言って、光がまぶしいためじゃない。太陽の黒点を見たい訳でもない。サングラスがないと、人とともに眼が合わせられないのだ。人と話ができないのだ。サングラスがないと、玲子の視線は彷徨う。この彷徨する視線を人に見られたくないのだ。

玲子は思う。人はそれぞれ様々だ。金持ちもいれば、貧乏人もいる。いじわるな人もいれば、やさしい人もいる。無愛想な顔もいれば、満面笑みの顔もいる。だが、本当にそうか。玲子の眼に、そう映っているだけであって、本質は異なっているのではないか。自分が、あの人は悪い奴だ（そう、自分にとっては、無愛想な返事しかしないから、悪い奴なんだ）と、思い込んでいるだけじゃないだろうか。

そう考えると、玲子は、他人に自分の眼を見せることができなくなってしまった。玲子の眼に映る万華鏡の人々。玲子の眼は、色眼鏡。他人が黒く見えたり、赤く見えたり、白く見えたりする。虹色のごとくの七変化。他人を異なる色にししか見えない玲子。玲子が、玲子を変えられない以上、玲子は、玲子の眼を他人には見せられない。

「それでもいいのだ」

玲子は、視線が漂う間、サングラスを掛け続けようと思った。

九 血を啜る女

女は思い出そうとした。最初に血を見たのはいつの頃だろうか。

「痛い」

口の中に、ビスケットを放り込んだ。お腹が空いていたわけではないけれど、慌てて、歯を上下

させたものだから、歯が口内の肉を、お菓子と間違えて噛みちぎろうとしたのだ。

「痛い」

痛みがすぐに脳に届く。口内での反応も早い。生温かい液が噴き出す。舌で舐める。ビスケットの甘い味じゃない。しょっぱい。血だ。血の味がする。その血を飲み込む。

人は、ビスケットやお米、肉などの食物から、栄養素を得て、体の筋肉や血を作り出す。今、飲み込んだ血が、再び、血となり、自分の体の中を巡る。循環型社会の最小形態の在り方だ。

血は、心臓から動脈を通じ、末端の細胞まで運ばれ、それぞれの細胞に栄養を与えると、今度は、老廃物等を吸収し、静脈を通じて心臓まで運ぶ。それとは異なる道筋で、切れた唇から噴き出した血を、再び、飲み込みむと、血は喉を流れ、胃に到達し、小腸から吸収される。そう、血を巡る循環。別のルートがあってもいいじゃないか。

「血を啜る」

なんだか、吸血鬼みたい。それも、自分で、自分の血を啜るなんて、ユニークだ。自己愛の最終形態だ。自己完結された肉体。自分の物は自分の物。他人には、決して与えない。なんて、自己満足の塊なのだろうか。そんな人間が美を獲得できるのだろうか。

いいや、できる。それだからこそ、できるのだ。

女は、自分を美しいと思った。その美しさの源である血を循環させるのだから、美しくならないわけがない。美の循環。なんて、美しい言葉だ。

女は、体中に、女の一部である血を女の形として循環させるのだ。女は、自分を循環させることで、美しくなれると信じていた。

十 ちゅうちゅうする女

あたしは、飲み物を飲む際、ストローを使わないと、うまく飲むことができない。

ストローを常に持ち歩き、牛乳やジュースだけでなく、固形物も、ストローを使って、吸収しようとする、ちゅうちゅう大好き。だってちゅうちゅうと吸えば、いつまでも、ちゅうちゅうが出てくるんだもの。

最初のうちは、いちごの味がした。、でも、そのちゅうちゅうを、更に、ちゅうちゅうを続けると、赤がピンクになり、そして、手首を切った時、その傷口から、したたり落ちる血が、うがい用に注いだ水の中に、ポツン、ポツン、ポツンと落ちていき、波紋が広がっていくような色彩に変わっていく。そんな赤だ。いや、もうそんな姿は赤とは言えないのかもしれない。透明な赤。赤の透明。

眼をしばたたかせれば、しばたたかせるほど、赤が透明に変化していく。体の中から放出された赤は、生命の尊さを最大限に誇示することで、自らが透明になっていく。

もういいかい。もういいかい。もういいかい。三度の口癖が、外出された赤を対象化させる。誰も追って来ないことに、安心したのか、透明の赤は、自らの生命の尊さを誇るかのように、もういいよ、もういいよ、もういいよと答え、透明になっていく。

鬼は、あたしが答えるのを聞くと、あたしを探すことをやめ、一目散に家に帰る。もう、かくれ

んぼが終わったかのように。あたしは、誰もあたしを探しに来ないこと、そう、取り残されたことを知っているにもかかわらず、その場でじっとしている。他の誰かが、あたしを見つけてくれることを待っているのだ。他の誰かって、誰？あたしは、その間、何をすればいいの。永遠の待ちぼうけ。

あたしは、躊躇することなく、ちゅうちゅうする。口をすぼめて、ちゅうちゅうする。口をすぼめれば、すぼめるほど、口が小さくなる。普段から、大口を開けて騒ぐこともなくなる。ちゅうちゅうすれば、おしとやかにもなる。おしとやかになれば、きれいになる。

ちゅうちゅうで、あたしは、びゅーていふる・ふぁいたーになれる。

十一 妊娠中の女 から 十五 足がでかい女 まで

十一 妊娠中の女

父親が誰だっていい。半分は、徳子の血だ。徳子のDNAだ。つまり、徳子の子どもだ。徳子の分身だ。

徳子は、もう、三十七歳。自分の体力としては、出産には限界の年齢が近付いていると知っていた。

今、妊娠、三か月だ。あと七か月後には、徳子はお腹の子と分離している。

お腹を触る。気のせいか、いくぶん、ふっくらとしている。手のひらで撫でる。指紋がひっかかることなく、なめらかに小山を滑る。

徳子は、生きている。手も。お腹も、生きている。だけど、生きているはずなのに、生きている実感はなかった。

朝、目覚め、食事をして、仕事をして、夜になれば、ベッドに横たわる。当り前のような、毎日。これが、生きているということなのだが、逆に、生きていることからこそ、生を実感できないこともある。

そんな徳子に、子どもが授かった。今、三か月。徳子は、徳子として生きている。脳も、心臓も、胃も、腸も、髪の毛も、目も、鼻も、口も、耳も、首も、胸も、胴体も、両手両足も、全て、徳子として生きている。

その徳子の体の中に、今は、徳子とは別の命が生きている。不思議だ。でも、感動的だ。徳子は、その命を育てる。例え、その命が、徳子の体をのっとりとうとしてもかまわない。既に、徳子の命が、その命の中に引き継がれているのだから。

徳子は、徳子とは違う命を生み出すことで、美しくなれる。新たな命を生み出した結果、例え、徳子がひからびて、ミイラになろうとも、新たな命が、みずみずしく美しければ、徳子もまた、美しいのだ。

そう、徳子は、びゅーていふる・ふあいた一なのだ。

十二 シャンプーハットの女

女は帽子をかぶせさせられた。髪の毛が水に濡らされ、シャンプー液が掛けられる。女の髪の毛の中に誰かの指が突っ込む。一本。二本。三本。四本。計十本だ。その十本が自由自在に女の髪の毛を様々な形に彫刻する。

十本の指たちは、女のために髪を洗っているのだが、女にとっては苦痛以外のものでない。差しこまれる手。逆立つ髪の毛。

パイナップルの頭になった。鉄腕アトムにもなった。一角獣にもなった。サザエさんにもなった。笑える。自分の頭、自分の髪の毛なのに笑える。笑うことで、自分が浄化されるような気がした。そして、シャンプーで、髪の毛も浄化される。

水が突然頭に掛けられた。急いで、眼を閉じる。水を掛ける時ぐらい、水を掛けるよと事前に言って欲しい。小さい頃を思い出した。パパが、そう、女がまだ子どもの頃は、あのおっさんは、パパだった。そして、女が幼女から大人になるにつれて、パパはおっさんになった。

その頃のパパは、十本の指で、女の髪の毛をやさしくときほぐしてくれた。女は、その間中、眼を瞑って、口を閉ざし、両手で耳を押さえていた。世界とつながっているのは鼻からの呼吸だけだった。じっと、じっと、嵐が通り過ぎるのを我慢していた。でも、パパが、やさしくシャワーで髪を洗い流してくれたので気持ちよかった。

水粒が頭皮に当たり、はじかれる。トントントンもあれば、どんどんどんもある。誰かが、夢のドアをノックしてくれているのだ。だが、それも束の間。パパが、タオルで髪の毛を拭く。ごしごし。さらさら。頭が揺れる。震度三だ。逆立つ髪の毛。

「さあ、終わったぞ」

パパからの最後通告。頭を軽く撫でられる。女は立ちあがり、湯船に飛びこむ。ドボン。水しぶきが上がる。今の、女の髪の毛と同じ様に逆立つお湯。お湯の髪の毛も洗われたいのか。だが、お湯の髪の毛は女と同じように洗われるのが嫌なのか、すぐに大人しく垂れ下がり、波紋となって水平に消えた。

女は湯船に飛び込んだものの、一刻でも早く、お風呂から出たかった。そんな女を諭すように、パパは、じゃあ、百の数字を数えられるか、と質問してくる。そんなの、簡単だよ。学校でならったもん。

女は、いち、にい、さん、と数を口に出す。パパだって、女が百まで数を数えられることぐらい知っている。女だって、パパが、女の体が温まるように、湯船に浸かるために、質問しているのを知っている。お互い、本当の事を知っていながら、知らないフリをする。これが、正しい親子の会話なのだ。正しい親子の関係なのだ。

「パパ。愛しています」

パパを愛していると言うことで、女は美しくなれる。他人を愛する者が、どうして、醜くなれるのでしょうか。その意味において、女は、びゅーていふる・ふあいた一なのです。

でも、愛するパパは、今は、ただのおっさんになっていた。

十三 削っていく女

長い髪なんて嫌いだ。あたしは、髪を掴むと握り拳からはみ出た黒髪をハサミで切り落とした。次は、眉毛だ。水で顔を洗う。あたしの顔から眉毛が消え、額の面積が広がった。元々、眉毛は剃り落とし、描いていただけだ。あたしの本当のない眉毛があらわれたわけだ。ない眉毛があらわれるとはどういうことだろう。

次は、胸だ。ほどよく膨れ上がった胸。砂丘の小山のようだ。子どもの授乳のための胸。だけど、今のあたしには、これからのあたしにとっても、こんなものは必要ない。ハサミじゃ無理だ。台所から包丁を取り出す。まずは、右胸。上から下へ垂直に滑らす。いっちょあがり。胸から白い乳の代わりに、赤い血が噴き出す。痛みはない。どうせ、妄想の世界だ。

次は、左胸。右胸に比べてやや小ぶりだ。右胸と同じように栄養を与え、同じように太陽の光を当て（関係ないか）、同じようにマッサージをして、双子同然に育てたはずなのに、育ったはずなのに、形や大きさが違うなんて、変だ。理不尽だ。理解不能だ。世の中にはよくあることだ。

左右対称こそが美しい。それこそが、黄金比だ。非対称なら切り落としてしまえ。左胸の上から下に、鈍く光る刃が滑る。

ドテッ。左胸が落ちた。これで、胸は余分な突起物が削除され、水平線が生まれた。これで、輝く朝陽がいつでも昇ってくるはずだ。

後はどこ？見つけたぞ。お尻だ。何のために、こんなに膨れあがったのだ。あたしがこれまで受けた負が重力に屈し、ここまで落ちてきたのだ。負の墓場。負の埋立地。負の廃棄物処理地。それこそが、ぷくぷくした象徴なのだ。

あたしは、胸を切りおとした包丁を掴むと、双子のお尻に刃を突き付けた。お尻も胸と同様、平等に育てたはずなのに、微妙に大きさが違う。何故だ。

わかった。効き足だ。いつも、歩く時に右足に力を入れ踏みだしたために、右のお尻の筋肉が左に比べて発達したのだ。だが、歩くときは、右、左、右、左と交互に足を前に出していたはずだ。右足だけ回数が多いはずはない。それとも知らず知らずの間に、ゴールに到着する最後の一步が、右足だったのかも知れない。

知られざる事実。知られざる真実。知られざる差別。知られざる不平等。だが、そんな心配も今日でおしまいだ。お尻よ、仲良く、どこへでも飛んで行け。さあ、自由はお前たちの前にある。あたしはお尻に包丁を下ろした。

あたしは、あたしの満足のいくように、あたしの輪郭を削る。鏡に映ったあたしは、あたしによって彫刻され、美を追求した結果の、本当のあたしになる。

例え、自己否定しようが、あたしは、あたしの美を追求する。それが、あたしの生き方なのだ。

包丁の先がポキッと折れた。

十四 電車の線路の側に住む女

「わあ、すごい」

リンダは、開け離れた窓から電車を見送った。電車は二両編成だった。四両編成を誇示する時もあるが、わずか一両で気が付かれないうちに消えていく時もある。だからこそ、電車の走ってくる音が聞こえてくると、急いで部屋の西側の窓を開け、見逃さないように、電車を待つ。

電車の前面でようこそと出迎え、側面で乗客に手を振り、後ろ姿に気をつけてと言葉を掛けるのだ。電車は、十五分に一本の割合だ。普段、会社にいる際には、気にならないが、自宅でいると、無性に、電車が通り過ぎるのを見たくなる。

「わあ、すごい」

また、声を上げた。声を上げると同時に、部屋が揺れる。

リンダは、ここに住む前は、別のマンションに住んでいた。国道沿いで、交通量が多く、一晩中、車が通行するため、その音が原因で、眠れない日々もあった。騒音から逃れるため、現在の線路沿いのアパートに移ってきたのだ。当初は、車も電車も、同じ騒音だから、嫌だと思ったが、家賃や立地場所等を考慮するとともに、一刻も、今、住んでいるマンションから逃げ出したかった。

移ってきたのは正解だった。これまで、生きてきた中で、正解はあまりなかったものの、今回の引っ越しは正解だった。小、中、高、大学で、様々な試験を受けてきたが、どちらかと言うと、正解よりも、不正解が多かった。だが、今回の、引っ越しは、大正解だった。これまでの、不正解を全て取り戻せるくらいの正解だった。何が正解かと言うと、電車を見られるからだ。電車が通るのを楽しみにすると、電車の音はよけいに待ち遠しくなる。リンダは、電車を見ることが生きがいとなった。

再び、わあ、すごい声。わあ、楽しい声。

この感動が、この喜びが、リンダをきれいにさせる。目は流れ星の輝きを放ち、口元は三日月の喜びで満たされ、ほっぺたには永遠の少女を讃えるえくぼが二つなど、過去に喪失した一切の物がタイムマシンで甦ったかのように、浮かび上がる。

「わあ、すごい。あたし、きれい？」

十五 足がでかい女

「駄目だ。この靴も入らない」

女は、無理に入れようとした靴を脱ぎ棄てた。折角、デザインが気に入っているのに。女の足が大きすぎるため、靴に入らないのだ。靴を大きくするか、自分の足を小さくするか、選択肢は二者択一だ。

だが、實際上、選択肢は、一つしかない。そう、自分の足を今から、纏足にすることはできない。残された選択肢は、ひとつ。自分の足の大きさに合う靴を探すしかない。それが、例え、ガラスの靴であろうと、夜中になれば消えてしまう靴であろう、構わない。自分は、一生かかって、自分の靴を探すのだ。

じゃあ、それまでは、裸足なのか。そう、裸足でいい。かつて、裸足のマラソンランナーもいた。今、裸足で、砂の上を歩く健康法もある。裸足で砂の上で歩くことで、歩く際の、重心の掛け方がわかり、効率的に、かつ、スピードアップの走り方が学べるらしい。

どうして、こんなこと、つまり、自分の足が、標準的な足に、市販の靴のサイズに比べて大きくなったかだ。女は、普通に生きてきたはずだ。特に、大きな足音が出るように、足を地面に叩きつけてきたわけでもない。いや、反対に、できるだけ、足が地面に触れないよう、つまり、足に重力がかからないよう、歩いてきたつもりだ。

そう、やはり、つもりだったのだ。その結果が、このざまだ。ざまは見たくはないけれど、ざまは事実だ。ざまに直視しないと、ざまの真の姿を見ることができない。

いや、そんなことは、どうでもいい。女は、自分の足に合う、自分の足の皮膚を覆う、靴を探

すことに決心した。それが見つかるまで、素足でもいい。血みどろになってもいい。この二本の足があれば、自分は、自分の足に合う靴を探せる。自分に合う場所を探せる。

女は、自分の足のために、びゅーていふる・ふあいたーとなった。

十六 バットを振り回す女

ビューン。ビューン。風を切る音がする。

あたしは、「はあ」と息を吐いた。金属バットを再びかつぐ。グリップを強く握りしめ、いつでも打てる。

さあ、来い、球。あたしは何もない空間に目を凝らす。

来た。あたしは迷わずバットを振る。バットはボールにかすりもせずに、大きな軌道のみを描いた。

あたしは、もう一度、バットを構える。今度こそ、当ててやる。エアーバッティングセンターから、再び、ボールが投げられた。相手がエアーボールなら、こちらもエアーバットだ。

あたしは肩が抜けそうなくらい、バットを放り投げれば外野席に放りこめるぐらいの勢いで、バットを振った。またも、空振りだ。相手がエアーボールだけに手ごたえがない。だが、このままでは止められない。

ノーボール、ツーストライ。あたしが知らない間に、あたしの後ろに審判員が立っていた。こちらにも、エアー審判員だ。本当に、球が見えているのか、審判ができるのか、あたしは疑念が沸くけれど、審判員は神様だ。文句は言えない。そんなことを気にするよりも、投げられた球を正確に打てばいいだけだ。自分を信じる。

あたしは、今一度、バッターボックスからはずれる。落ち付け。落ち付け。集中だ。集中だ。来た球だけを打ち返せばいいんだ。エアーバットのグリップを強く握り締め、打席に入る。バットを構える。エアーピッチャーからボールが投げられた。ボールの軌道がはっきりと見える。ストライクコースだ。ど真ん中だ。来た。今だ。

あたしはバットを振った。バットの真芯でボールを捉えることができた。そのまま振り切る。ボールはレフト方向に飛んで行く。レフトを守備しているエアー選手が後ろに向きに追い掛ける。走る。走る。だが、あきらめたのか、立ち止り、こちらに振り返った。

ボールは外野スタンドの中に消えた。ホームランだ。エアー主審が右手を上げ、ぐるぐる回している。エアー観客が総立ちで、拍手している。あたしの顔に笑みが浮かんだ。

これであたしは、もったきれいになれる。

十七 うどんをすする女

するするする。ずるずるずる。

うどんの麺が器から唇へと鯉の滝登りのように登っていく。出汁を含んだ麺が唇まで届くと、上唇と下唇に挟まれ、麺だけが口の中に滑り込んで行く。麺の周りに付着した余分な出汁は、登って来る麺を伝い、反対に、器の仲間の元に戻っていく。汁の中には、折角、自由を得たのに、今さら、器にもどれるか、と跳ねっ返り、台の上や服やほっぺたに飛び散る者もいる。

「あーあ、また汚しちゃった」

あたしは、うどんの出汁が飛び散ったブラウスを見つめる。お気に入りの白いブラウスが一部分だけ水玉に模様替えしたことを悔やむ。ポケットからハンカチを取り出し、水玉の上から叩く。つま楊枝の先の大きさの水玉が、にじんで、ほくろ大になる。

「いやだあ」

思わず呟くあたし。強く、ハンカチで、ほくろ染みを叩くあたし。ほくろ染みは、より一層勢力を増して拡大し、ブラウス全体を染みで埋め尽くさんばかりの強い意志を持つ。だが、援軍が来ないので、一円玉大にまで勢力を伸ばすのが精一杯であった。

「あーあ。本当に、嫌になっちゃう」

よかれとしたことが、結果的にアダになることを知ったあたしは、シミを叩くのをやめ、うどんを啜ることに専念した。うどんは、あたしが寄り道をしている間に成長することは良しと思い込んでいるかのように、ぶよぶよの歯ごたえで、食べる人にとっては、本来のうどんの味には遥か遠くになりけりの感慨を抱かせながらも、麺に出汁を吸い込ませ、膨張する。

あたしは、そのうどんに果敢に戦いを挑む。先ほどより膨れたうどんをやや開いた口で啜る。気をつけなければ。あたしは、さっきよりも汁がほとぼしりやすくなった麺に注意しながら、ゆっくりと啜る。万が一、汁が飛び散っても、ブラウスには月面宙返りで着地しないように、うどん器仮面としてヒーロー扱いになることもためらわず、器に顔をできるだけ近づける。

啜る際に唇からこぼれた汁は、折角、鯉の滝登りに負けまいと、重力に反して駆け上がっていたにもかかわらず、パスポートがないから入国できない旅行者のように、すごすごと汁の中に戻っていく。登りつめないままに下るしかできず、永遠に埋没した人生の悲劇性を身にひしひしと感じながら。

あたしはすする。ススル。啜る。麺を全てお腹の中に格納できた。次は汁だ。ようやくお前の番だ。先ほどの不埒な好意は許してやろう。唇を器に近づける。ごくり。喉を通り過ぎた。全てが完べきだ。

もう、あたしの意に反して、跳ね返ろうとする奴（汁）はいない。満たされたお腹。そして、心。この満足さが、人を美しくさせるのだ。

テーブルの上の器と半分以上残った汁。斜めに置かれた箸。椅子に体ごと斜めに倒したあたし。お腹はぼっこりと突き出ている。この統一性のない、アンバランスな情景の中に美があるのだ。

あたしは目を閉じ、幸福の瞬間、美の形を永遠に感じるのであった。

十八 太ももの女

育代は触る。自分の太ももを。上から下に、下から上に。触ると言うよりも撫でると表現した方がいいだろう。愛おしいのだ。自分の太ももが。張り詰めているのに、弾力がある。まさに、太ももだけが別人格を持って、生きているようだ。

育代は短距離ランナーだった。中学、高校、大学を卒業した後も、社会人として、陸上の全日本選手権などに出場してきた。残念ながら、世界選手権やオリンピックに出場できるほどの成績は

残せなかったものの、自分なりに、結果については満足している。

現役選手を退いた後も、地元のスポーツクラブで、子どもたちを教えながらも、マスターの選手権などには出場している。そういう意味では、まだまだ現役選手だ。現役だけは続けたい。よく、有名選手が現役を退いた後、競技をやめることがよくある。

確かに、きつい。練習が肉体的にきついのはもちろんこと、タイムが伸びないのは当たり前だが、タイムが落ちていくのが辛いのだ。昔は、あのタイムだったのに、今のタイムの平凡さに愕然とするのだ。タイムが落ちることで、人間性も否定されているような気持ちになる。タイムは現実なのだが、恐るべき現実の前で、人は逃避せざるを得ない。

短距離にしろ、長距離にしろ、タイムが明らかになる競技は残酷だ。技は熟練できるが、タイムはごまかせない。ごまかそうとすればルール違反だ。現実のタイムの中で、人は過去の栄光と現在の没落に悲喜を感じる。

だが、癒しの手はある。少し、競技を変えるのだ。育代は現役の時、百メートル走の選手だった。今は、六十メートル走に競技を変更している。

百メートルはきついが、六十メートルならば、何とかなる。前半ダッシュ型だ。年齢を重ね、筋力が落ちると、持久力も落ち、後半、特に、六十メートル以降、筋力が持たなくなり、そのまま倒れるかのような走りの姿勢になってしまう。これでは、駄目だ。

筋力トレーニングも重ねた。だが、寄る年波もある。無理をすると、膝が痛くなった。走っている時に、膝が抜けそうになる感触もあった。体との折り合いだ。それ以来、育代は、六十メートルを中心とした競技に参加している。

今日も頼むよ。

育代は、毎朝、起床すると、ふともも、膝、ふくらはぎ、アキレス腱を撫でる。特に、ふとももを重点的に撫でる。ふとものを撫でると、ふとももはぴくっと反応する。もちろん、育代が反応しているわけだが、いつも、ふとももだけが別人のような気がしてならない。育代という体とふとももという体。

育代は、ふともものはちきれんばかりの美しさを誇る。自分自身は、このふともものためにあるような気がする。極端な話をすれば、育代自身がふとももに寄生しているかのようなのである。もちろん、栄養を摂取し、行動を命令しているのは育代自身なのだが、全ての行動は、ふともものために行っているような気になる。つまり、育代が、ふとももにお仕えしているのだ。

ふともも様。

ぷっ。育代は笑った。ふともも神に仕える育代。想像するだけで楽しい。なんだか、ふとももに支配されているみたい。

育代は、今日も、ふとももを愛おしく撫でつづけるのであった。

十九 虫めがねの女

懐かしい。

女は、つい、口にした。机の中を整理していると、虫めがねがでてきた。小学生の時に、理科の

授業で使ったものだ。花を見たり、虫を見たりした。中学生になってからは、使うことはなく、忘れてしまっていた。いや、忘れていたわけではない。存在していることは知っていたが、必要がないので、使おうとしなかつただけだ。

虫めがねのガラスの周囲はピンク色。そう、昔、子どもの頃、好きだった色だ。ランドセルは赤だったが、筆箱も、鉛筆の柄も、消しゴムも、全て文具用品はピンク色だった。

女は虫めがねを手取る。何が見えるかな。世界がぼやけている。焦点が定まらない。今の、女と同じだ。失業し、父や母とも離れて、ひとり暮らしの女。友だちもいなく、仕事を探すためハローワークに通い、何とか面接にはこぎつけるものの、採用はされない。

「あなたには、もっと適した会社がありますよ」

ハローワークの担当者に励まされるものの、度重なる不合格の通知で、窓口に向かい合う両者の口数は少なくなった。

毎日のように通い詰めていたハローワークも、次第に、足が遠のき、一週間に一回が、二週間に一回となり、更に一か月に一回と次第に減少していく。それとともに、家を出る回数も減り、一日中、部屋に閉じこもり、家から一步も出ない日がある。

いや、家から出るどころか、ベッドからも起きあがれない日もある。ベッドで食パンを齧り、牛乳を飲み、バナナを食べる。さすがにトイレだけは、起き上がり、用を足す。それ以外は、すべてベッドだ。

失業保険も今月で止まる。危機的状況なのに、心の中は、このままでもいいんじゃないかと思っている。

このまま、このまま。このまま、このまま、来られたんだ。このままで、ずっと、いい。

女は、寝る前に、そして、朝、目覚めた時に、このままで、このままで、ずっと、ずっと、いいんだ、と呟くようにしている。

そんな時だ。ベッドから立ち上がり、ふとしたはずみで、実家から持ってきた勉強机にもたれかかった。離れる際に、引き出しを引っ張ってしまった。その引き出しの中にあったのが、虫めがねであった。

女は虫めがねを何気なく手に取り、ベッドへ向かった。寝ころんで仰向けになった。右手で虫めがねを持ち、目に近づけた。部屋全体がぼやけている。どこに、何に、焦点を定めきれずに、全てが曖昧で、輪郭を持つことを拒否しているのだ。よく言えば、渾然一体だ。今の、女も、この部屋とベッドと体が一体化している気がする。部屋が物理的に移動できないため、女もこの部屋から抜け出せないのだ。いや、本当のところ、抜け出したくないのだ。

女は、焦点を定めようと手にした虫めがねを手の長さ分だけ離れた。離せば何が見えるのか。天井のビニールクロスが拡大して見えた。だが、やはりぼやけている。それに少しくすんでいる。年に一回大掃除でも天井は掃除したことがなかった。当然の結果だ。

でも、虫めがねのおかげで、汚れていることは意識できた。蛍光灯に眼を移す。まぶしい。これが太陽ならば、目に黒点ができるだろう。太陽からの贈り物。目の中に炎ができるのか。今は、そんな気力はない。

遠くを見つめることはやめた。虫メガネは近くの物を拡大して見るものだ。遠くの物はぼやける

のは当たり前だ。自分だって、自分の遠い未来はぼやけていてはつきりしない。いくら望遠鏡で見えたとしても、次の瞬間、変わっているかもしれない。その点、近くならば安心だ。変化があってもすぐに対応ができるからだ。

女は掛け布団を見る。細かいほこりがついている。そう言えば、ここ一か月間、ふとんを干したことがない。家を出るのはもちろんのこと、ベッドからも抜け出ることが嫌だったので、当たり前だ。

また、左手をみる。皮膚の皺がみえる。毛穴も見える。この下に無数の細胞があり、自分が生きている限り、この細胞は生きているんだ。虫めがねをずっと近づける。ズームアップする。皮膚の中に、口があり、鼻があった。鼻から三回息を吸い込み、口から五回息を吐きだしている。

まさか。

女は目をしばたたせる。あまりにもベッドで横たわっていたので、起きていながら夢をみているのか。目をつぶり、目を開く。そして、虫めがねから左手の甲の皮膚を見る。

すーすーすー、はーはーはーはーはー。やはり、皮膚の中に、鼻と口があり、息をしている、吸う回数と吐く回数が異なっている。大丈夫なのか。ずっと吐き続ければ、細胞がちじんでしまい、細胞がちじむということは、女自身もちじむということだ。

ひよっとしたら？

女はベッドから立ち上がった。ベッドの側の壁に立つ。女の部屋は一LDK。玄関から入れば、ベッドルームとキッチンがあるだけだ。玄関の入り口に近い壁。白い生地に斜め模様が入ったビニールクロスだ。天井と同じようにくすんでいる。そこに、女の背丈ほどの高さに、鉛筆の線が入っている。女の右手に握られている物は、虫めがねから鉛筆に変わっていた。背中を向け、お尻と肩甲骨を壁に押し立てる。頭の髪の毛に鉛筆を押しあて、線を引く。壁から離れる。同じ個所に別の線が重なり、線は太くなっていた。

大丈夫だ。ちじんではない。

ほっとする女。そして、再び、ベッドの中に戻り、虫めがねで自分の左手の甲を見る。虫めがねが映し出す女の細胞。相変わらず、鼻から息を三回吸い、口から息を五回吐いている。息を吸う度に、細胞が倍に膨らみ、息を吐くたびに、半分に縮小している。その姿を見るたびに、女は、自分の細胞なのに、何だかおかしみと親しみを感じた。

もしかしたら。

女は左手の甲だけじゃなく、親指や人差指など、指の先や、手のひら、手首なども、虫めがねで観察した。

やっぱりそうだ。

それぞれの細胞には、鼻と口があり、鼻から息を三回吸っては、膨張し、口から息を五回吐いては、収縮している。女の皮膚全体の細胞が呼吸しているのだ。

本当ならば、皮膚の細胞の呼吸に合わせて、女の体全体も膨張と収縮を繰り返すのだろうが、隣同士の細胞が、交互に吸う行為と吐く行為を繰り返しているために、女の体全体までには影響を与えてはいない。不思議な調和だ。自然の調和だ。

女は虫めがねをはずして、天井を見つめた。そして、スー、スー、スーと鼻から息を三回吸い込

むと、口から、ハー、ハー、ハー、ハー、ハーと息を五回を吐いた。

そうだ。

女は飛び起ると、掛け布団を体中に抱きかかえ、ベランダに向かった。太陽が空の頂点に達していた。ベランダに掛け布団を干し、続いて敷布団を干した。そして、大きく背伸びをした。

あーあーあーあーあー。

鼻から息を吸い込み、口から息を吐きながら、大きな声を上げた。呼吸の回数は数えていなかった。

二十 目で演出する女

あたしはさつきから座ったまま、ずっと凝視していた。本を読み、テレビを鑑賞して、窓の外に眼をやり、昼ご飯のうどんを見続けている。全く、体は動かさず、だだぴっろい食堂の椅子に座っている。たまに、トイレに行ったりはするものの、基本的には、座り続け、眼球だけを動かしている。

あたしは、ただ見ているだけではない。見ることで、演出しているのだ。あの正面の壁は、なんて色けがないんだ。確かに、白い壁は薄汚れており、ところどころに染みが付いている。ぶさいくだ。美しくない。

あたしは目を瞑った。再び、目を開けた。薄汚れた壁は水が流れていた。滝だ。部屋の四方が滝になっていた。流れ落ちる水にあたしが揺れて映っている。何人ものあたし。本当のあたしはどこ？

でも、これでいい。

次は、天井だ。天井のビニールクロスも、壁同様、薄汚れている。壁以上に掃除はできていない。年に一回、大掃除の際に、蜘蛛の巣を除けるため、ほうきで天井を撫でるぐらいだ。この広い部屋でいた人々の吐く息や体臭、カレーやうどんなどの匂いが澱となって一旦、床に沈み、一晩立つと、ゆっくりと上昇し、壁に張り付いた感じだ。それも地層のように、匂いが何層も、何層も重なっている。

これを剥がしたほうがいいのか。それとも、上から何かを重ねて誤魔化すのがいいのか。

あたしは目を閉じた。再び、目を開け、天井を眺める。

雪だった。薄汚れた天井に雪が降っていた。今も降り続けている。足元の地面から、雪が舞い上がり、天井に積っていく。汚れは全て、雪が覆い隠してくれた。今も、あたしの目の前を雪が上昇している。粉雪だ。粉雪が浮かび上がっては、天井に降り積もっている。

変なの。

あたしは呟いた。と、同時に、きれいだと思った。これまで、何百年、何千年と空から振ってきた雪が、水が、今は、地上から空に戻っているのだ。自然の摂理だ。

ひよっとしたらあたしも？

あたしは椅子から立ち上がった。立ち上がった顔の前を雪が上昇していく。雪を掴む。キュ、キュ。そのまま、踵を上げ、つま先立ちになる。一秒、二秒、三秒。だが、雪のようにあたしの体は浮かない。ふくらはぎが緊張して、震えだす。アキレス腱が痛い。

もう、だめだ。

あたしは、再び、椅子に座り直した。右手で掴んだ手のひらを開いた。雪は消えていた。そして、目の前を浮かび上がる雪も、天井に降り積もった雪も、壁の滝も、床の青い空も全てが消えていた。

それでもいい。

あたしは、瞬間だけでも、世界がきれいに見ることができれば、自分もきれいになれると確信していた。

他に、何か、見えないかな。そうだ。

はい、上を見て。右斜め上。右横。右斜め下。下。左斜め下。左横。左斜め上。はい、ご苦労さん。

眼科医で検診を受ける際のように、自分でしゃべりながら、眼球を動かし、目に見える範囲の世界を凝視した。ただし、それだけでは十分じゃない。自分が見えない世界も見たいのだ。

首を左右に回せば、視界は広がる。だが、自分の背中側の世界は見えない。首を上下に振る。天井から床まで見える。だが、左右と同じだ。自分の背中側の世界は見えない。見えない世界を見ようとする。世界を見ることで、自分が美しくなれるのだとあたしは信じて疑わない。

あつ、やばい。

あたしは、思わず、目に手を当てる、あまりにも目に力を入れ過ぎたのか、目から血が噴き出した。赤色に染まった世界。朝焼けと夕焼けが同時に来たみたいだ。

あたしは、座ったままで、新たな世界を手に入れることができた。新たな世界こそが美の象徴であるかのように。

二十一 万歩計の女

「歩こう、歩こう。私は元気。歩くの大好き。どンドン歩こう……」

歩は、体重計の上で、元気よく手を振りながら、足を上下させていた。服装は、Tシャツにジャージのトレーニングパンツ。首にはカラフルな虹色のタオルを巻いている。また、パンツの左ポケットには、万歩計を入れている。歩が足を上げる度に、振動で万歩計のデジタルの数字が増えていく。

歩は、万歩計の上を歩くのだけではつまらないので、BGMの代わりに歌を歌う。

「幸せは歩いて来ない。だから、歩いて行くんだよ。一日一歩……」

歩は歌を変えた。同じ歌ばかりでは面白くないからだ。腹から声が出れば、腹筋も鍛えられる。一歩で二度美味しい行為だ。

歩の額に汗がにじむ。首に掛けているタオルの先を右手で持ち、汗を拭う。

と、同時に、ポケットから万歩計を取り出し、歩数を確認する。今は、三百六十五歩だ。

どこかで聞いた数字だ。何かの歌の題名だ。まあ、いい。

次は、体重計を確認する。体重計の上で足踏みをしていた時は、足の裏が体重計を踏みしめる度に、数字が大幅に増減して、正確な体重がわからない。体が静止している状態ならば、数字も静止している。

五十一・三。この数字が歩の体重だ。これが適切な数字なのか、軽いのか重いのか、歩にはわからない。身長は百五十七センチだ。体重計の横にある標準表を見た。太り過ぎでもなく、やせ過ぎでもない。標準だ。何だか安心した。だけど、標準って何。体重だけの問題ではないような気がする。生き方にも標準があるのだろうか。

その標準を決めたのは誰だ？

歩は、考えながら、再び、体重計の上で、歩きだす。

「標準、ひょうじゅん、ヒョウジュン、標準、ひょうじゅん、ヒョウジュン、……」

言葉が頭の中の巡り、頭の中の標準計の上を歩き続けている。歩は、實際上、体重計の上で歩きながら、頭の中では、標準計を歩み続けているのだ。

「ふう。疲れた」

頭と足の両方の疲れだ。動きを止めた歩。ポケットから再び、万歩計を取り出し、デジタルの液晶を見る。数字は七八七を表示している。

どこかで聞いた数字だ。七八六よりはひとつ多い。つまり、なやむ、悩むをひとつ越えた数字だ。

「おっ、すごい。さっきと比べて、二倍弱だ」

歩は何だか急にふっきれた。太り過ぎだろうが、標準だろうが、やせ過ぎだろうが、そんなことはどうでもいい。自分は万歩計の上で、万歩していくんだ。

歩は、歩の美に向かって、引き続き、歩き始めた。

二十二 暴言吐きの女

「くそつたれ。死んでしまえ」

女は、狭い部屋の中で叫んだ。だが、叫んだ内容に比べて、やさしく、かぼそい声だった。誰に対する、くそつたれなのか、死んでしまえ、なのか、女自身もよくわからなかったが、言葉を発すると、何だか気持ちが落ち着いた。だが、しばらくすると、ムカムカしてきた。吐き気がもよおしてくる。まさか妊娠？

女は二十八歳。付き合っている男はいた。だが、最近、別れたばかりだ。別れる半年以上は、体の関係はない。だから、妊娠のおそれはないはずだ。別れた原因は、男の暴力。手で頭や体を殴られたり、足で腹を蹴られたりした。

また、行動による暴力だけでなく、馬鹿や死ねなど、ののしられるなど、言葉の暴力も受けた。原因は、男の短気と、女の反撃だった。多分、男とは磁石で言えば、プラスとプラス、マイナスとマイナスの関係だったのかもしれない。

それなのに、よく付き合ったものだと思うかも知れない。例えば、電池は直流であれ、並列であれ、同じ方向を向くことで、電池が流れる。男との関係もまさに、同じであった。同じ夢を見て、同じ食べ物を食べて、一緒に出掛けて、同じ場所に宿泊した。同じ方向を向いている間はよかった。それが、ある日を境にして、違う方向を向くようになった。多分、それは、男の寝相が悪く、女を足蹴りにして、女がベッドから落ちた時からだ。

そんな馬鹿な話だと言うかもしれないが、そんなものだ。同じ方向を向いているからこそ、理解できたことが、違う方向を向いていると、些細な行為でも全く信じられなくなる。

男と別れて、暫くしてからだった。突然、マグマの噴火のように、死んでしまえ、のたれじにしろ、などの怒りの言葉が噴き出てきた。抑えようにも、抑えきれない。ある時などは、両手で口を覆ったところ、鼻から怒りの呼吸が噴き出た。耳からも噴き出た。目からは涙が流れ出た。これでは駄目だ。

女は両手を使い、マグマを喉で閉めた。これなら大丈夫。だが、呼吸ができない。それに、怒りの声が胃や小腸、大腸でガスのように膨張していく。このままでは、いたずら小僧に口からストローを差され、息を吹き込まれたお腹を破裂させられたヒキガエルと同じ運命を辿ってしまう。何とかしないと。何とかしないと。女は喉のから手を離す。

あほんだら。死んでしまえ。馬鹿にしとんか。上から目線で見やがって。死ね言うんか。

立て続けに吐き出される咳や嘔吐のように、ののしる言葉がダムが決壊のごとく吐き出された。おかげで、見る見るうちに、お腹はしぼんできた。もちろん、やせたわけではない。

それでも、三十前の女だ。お腹がぽっこりでは、かっこうがつかない。ついでに、脂肪分も吐き出されれば、スタイルがよくなるのに。と、思いながら、とりあえず、怒りの声が発散されたことで、お腹は引っ込み、すっきりした。なんだか、溜まっていた澱や宿便が口から排出されたようだ。

いやだな。そんなものが口から出るなんて。だけど、よく考えてみれば、人間は、チューブに手や足などが引っついてある生き物である。口も肛門もたまたま、位置が違っているだけである。入り口が口で、出口が肛門なだけである。ひょっとしたら、反対の場合だってありうる。肛門からまぐろの刺身を食べ、口から消化されたゴミを吐き出す。口や肛門だけでない。耳の穴や鼻の穴、全身の毛穴からだって可能性がある。どこから排出物を出そうか、同じなことではないか。そう考えているうちに、再び、嘔吐感が。

「くそったたれ」

部屋中に響く声。声は女の部屋だけにはとどまらず、拡散する。ここはマンション。いいや、安アパートだ。隣に住んでいる人もいる。今は、日中なので、仕事に行っている人がほとんどいないので、女の声が他人に聞こえることはない。安心していたら、ピンポンとチャイムが鳴った。吐き気はない。女は、玄関へと向かう。

「どちらさまですか」女がドア越しに尋ねる。

「大家の松本です」ドアを開けると、六十歳過ぎのおばさんが立っていた。

「田中さん。困りますよ。昼間から、大きな音を出して。近所迷惑ですよ。サスペンス物かなにかのテレビですか。殺してやる、だなんて、物騒じゃないですか。音を小さくするか、イヤホンで聞いてください。よろしくお願いしますよ」

大家は、自分の言いたいことだけをしゃべると、ドアを閉めた。

女にとっては、大家の勘違いはありがたかった。だが、いつ、また、吐き気の怒り声を発するかはわからない。このまま部屋にいるわけにはいかない。

まただ。胃の中からどす黒い嘔吐物がせり上がってきた。女は口に手を当てた。漏れそうだ。サンダルを掃いて、外に飛び出す。女の部屋は二階だ。急いで階段を下りる。

「こ」が女の口から漏れ出た。両手で口を押さえる。

「ろ」が鼻の穴から漏れた。

「し」が涙と一緒に流れ出た。

「て」と「や」が右耳と左耳の穴からすーという音とともに、噴射された。

最後に、顔中の毛穴が開き、数千に分裂した「る」が女の顔を真っ赤にした。それでも、女は口を押さえたまま、近くの児童公園に走って行った。

「ふうう」口から手を離すと大きなため息がでた。罵詈雑言は影をひそめた。両太ももに両手を着き、腰をかがめ、もう一度、大きな深呼吸をした。

「ふうう」腹の中から、もう声は出ない。女はどこかに座りたかった。ベンチに向かう。だが、ベンチは木の板が腐っていて、座れなかった。他に座る所はないのか。女は、この際、地べたでもよかった。

「あった」女が見つけたのは、ブランコだった。懐かしい。子どもの頃、ただ単に、座って揺らすだけでなく、座ったままの姿勢で飛ぶ競争をしたり、立ち漕ぎをしたりしたものだ。

女はブランコに座った。ゆっくりと漕ぐ。足が地面から離れた。戻ってくる時は、膝を曲げ、足が地面に着かないようにする。ぶらり、ぶらり。行ったり、来たり。ゆああん、ゆよん。ブランコは振幅が大きくなった。両手は、鎖を握っている。

「くそつたれ」女は大きく叫んだ。これまでは吐き気をもよおすような、苦しみから生み出された怒りであったが、ブランコに乗ると、そんな気持ちは沸かず、軽い気持ちで口から言葉が出た。

「くそつたれ」何だか、楽しくなった。砂場では、子ども連れの母親たちが女の方を見て何か囁やいている。ブランコに遊びに行こうとしている子どもの手をしっかりと握りしめている。

「ははははは」女は、今度は可笑しくなった。腹の底から笑い声が出た。もう、くそつたれ、の言葉は出なかった。

二十三 ラジオ体操の女

朝、六時だ。目が覚めた。急いで、ふとんを跳ね除け、ベッドから立ち上がる。うーうーん。背伸びをする。りりりりりーん。数秒遅れで、枕元の目覚まし時計が鳴り始めた。今日も、目覚まし時計に勝った。時計は、依頼者からの役目を終えたにも関わらず、今だに鳴り響いている。

もう、おしまい。あんたの役目は終わったのよ。あたしは、やさしく、そして、皮肉交じりに、時計に話し掛ける。時計は、それを無視してか、関係ない素振りで鳴り続けている。

もういいのよ。一晩中、起きていてくれてありがとう。あたしを見守っていてくれたのね。もう、いいわ。ゆっくりお休み。

あたしは、時計の裏にある、目覚まし時計の設定ボタンをオンからオフに切り替えた。続いて、電池が入っている蓋を開け、電池を取り除くと、鏡台の上にはばらまいた。電池は二個。投げ出された円柱形が自由を得て、転がって行く。だが、行き先は決まっていない。

時計の針は、六時一分三十秒を指したまま止まっている。これから、時を刻む必要はない。しばらくの間、お休みよ。代わりに、あたしが、あたしの心臓で時を刻むわ。

あたしは、時計の頭をやさしく撫でてあげた。次は、あたしの頭を撫でる順番だ。

あたしは立ち上がった。そして、ラジオのスイッチを入れた。

「あたらしい朝が来た。希望の朝だ。……」

ラジオから流れてきたのは、ラジオ体操の音楽。小学生の頃、夏休みに、スタンプカードを手にして、早朝から児童公園に行ったものだ。もちろん、体操が目的ではなく、カードにスタンプを押してもらうのが目的だった。

スタンプの数によって、商品、つまりお菓子の量、質が変わってくる。今から思えば、たいした話ではないけれど、子どもにとって、何かをしたら、何かをもらえるということは、ものすごく楽しみであり、獲得する喜びがあった。今なら、数百円で買うことができるお菓子も、当時は、自分の力では手に入れることができない宝物であったのだ。そのラジオ体操が今、始まろうとしている。ただし、スタンプカードはない。

あたしは、ベッドの横に立った。音楽を聞くと、だらんとした背骨に筋が入った。

「ラジオ体操第一……」

そう、第一だ。運動の形を変えた体操を組み入れた第二もある。だけど、やはり、物事は第一から始まる。あたしは、ラジオ放送に合わせて、体を動かし始めた。

腕を回す。背筋を伸ばす。つま先立ちになる。膝を曲げる。手を伸ばす。その間、鼻から、口から、息が出たり入ったりする。体中から汗がにじむ。ちじみこんでいた筋肉が伸ばされ、痛い反面、伸びた後戻すと気持ちがいい。あたしの体の中を、酸素が、血液が循環する。今日が、始まった。今日、生まれ変わった。そんな気持ちだ。

ラジオからの放送が終わり、天気予報が告げられた。今日は晴れだ。あたしも晴れだ。あたしは、鏡台の鏡に映し出されたあたしを見た。あたしは、びゅーていふる。ふぁいた一だ。

二十四 ゼリーを食べる女

朝の八時十分。ここは商店街のアーケード。目の前の片側三車線、両側六車線の国道は、右に左に、バスや車、宅急便、トラックなどが、鎖でつながれているかのように、狭い車間距離のまま行き交っている。その光景を目の辺りにして、通勤・通学の人々が、信号待ちで横断歩道の前で立ち止まっている。

この街の特性・特徴なのか、ほとんどの通勤・通学の人々が自転車に乗っている。歩行者はわずかだ。商店街の道路の中心部を自転車部隊が占領し、歩行者は両側の隅に追いやられている。歩行者が真ん中を歩こうとすれば、川が急に増水し、中州に取り残された人のように、両側を走る自転車が通り過ぎるのを待つしかしかない。

その自転車の流れの先頭に尚美がいた。尚美も自転車に跨っている。赤信号のため、右足はペダルに乗せ、左足は地面に下ろしている。信号が青から赤に変わったばかりだ。先頭の尚美の自転車の後ろに、次々と自転車が止まり、並んで行く。

尚美は前かごに手を突っ込んだ。握りしめたのは手のひら大の栄養ゼリーだ。蓋を回す。蓋がはずれた。袋に口をつける。右手で押す。袋からはゼリーが押し出された。尚美は押しだされるスピードでは満足できず、口でちゅるちゅると吸いだした。信号が赤の間に、この栄養ゼリーを吸いこんでしまわないといけないからだ。

栄養ゼリーは、尚美の朝食だ。尚美は今日も寝坊した。服を着替えたり、髪の毛を整えたり、化粧をしたりであっという間に時間が過ぎた。朝食を食べる時間がなくなった。

尚美は冷蔵庫からゼリーを取り出すとハンドバックの中に放り投げた。よし、行こう。自転車に跨って家を出た。

ちゅるちゅる。ちゅるちゅる。尚美の頬にえくぼを包含するクレーターが生まれる。それに比例して、栄養ゼリーの袋がちじんでいく。だが、尚美は見る見るうちに巨大化することはない。栄養ゼリーは尚美の口でたまと、喉を通過し、胃に滑り込んでいく。尚美に吸収される栄養ゼリー。

尚美は、ひたすら、朝食という名の立ち喰い栄養ゼリーを口にする。多くの人が赤信号で待っているにも関わらず、誰も気にしようとしめない。信号の横に掲示されている信号待ちのインジケーターが下がって来た。最初は11に見えた数字がもう間もなく消えそうだ。

尚美は、両手を使って栄養ゼリーを丁寧に絞り出し、口バキュームで一滴残らず吸い取ると、その袋を前かごに乗せてあるハンドバックの中に無造作に放り込んだ。お腹が満たされたおかげで

、ややぼおっとした頭も冴え出した。体温も上昇したように思えた。

自転車の群れが勢いよく跳ねた。

二十五 宝石を身に付ける女

女は鏡台の前に座った。今日は、何をつけようか。ネックレスの箱の蓋を開ける。お気に入りのネックレスは、ティファニー、〇．〇三カラット。ダイヤモンドの宝石だ。

女は、女の誕生日に女のために買ったプレゼントだ。自分が自分のために買うのは、贈り物と言えるかどうかはわからないけれど、兎に角、女は自分に贈り物をした。それも、誕生日に誕生日プレゼントとして。

この時の女は、女であって、女ではない。女という女に、女はプレゼントをしたのだ。プレゼントをもらった女は喜んだ。人からプレゼントをもらうだなんて、久しぶり、そう、親からのクリスマスプレゼント以来だ。

今は、冬じゃない。初夏だ。それも、ちょうど梅雨の季節で、鏡台の前に座っているだけで汗がにじむ。窓は開けている。ひんやりとした空気が流れ込んで来るものの、空気が今にも雲に変わりそうなほど湿気を含んでいるので、体に当たると同時に、皮膚ガラスに水露がつく。毛穴が水で埋まり、皮膚呼吸ができなくなる。全身が空気プールに浸されている。気持ちがいいのか、気持ちが悪いか。やはり、気持ちが悪い。

その鬱陶しい気分を爽快にしてくれるのが、ネックレス選びなのだ。今日は、どのネックレスを身につけようかとあれこれ悩むのだが、この悩みが楽しみになる。

お気に入りのネックレスは、他にも、真珠がついたもの、ゴールドのものがあり、毎朝、この三者による決定戦が行われる。しかし、不思議な事に、いや、当然なことに、ダイヤモンドに決まることが多かった。現在、ダイヤモンドが選択される確率は約六割六分六厘。三回のうち二回はダイヤモンドが選ばれるのだった。

女はダイヤモンドを身に付けると、何だか自分が誇らしい気分になれた。女を見る人も、女じゃなく、まず、胸のネックレス、ダイヤモンドに目が吸いつけられる。これ見よがしの、いかにも、高額で、高慢ちきで、他人の存在を否定するようなものじゃなく、こぶりだが、存在感はあり、ふと、目に止まると、そこから目が離せなくなる。そんな、ダイヤモンドのネックレスなのだ。

女は、今日も、ダイヤモンドを手を取った。このところ、確率は、七割を超え、八割近くになっている。それでも、いい。女が選んでいるんじゃない。女が手に取る前に、ダイヤモンドが胸にひっついてくるんだ。

ネックレスを身に付けたまま、正面、右斜め、左斜めに体を鏡に映す。似合っている。自画自賛だ。さすがに、後ろは振り向かない。後ろから見られて、ネックレスが似合っていると言われても、嬉しくも何ともないからだ。

さあ、お出かけだ。行き先はない。このネックレスが行き先を決めてくれる。ダイヤモンドが女の人生という航海の羅針盤なのだ。

多面体にカットされたダイヤモンドがきらりと光った。女の進む方向を明るく照らした。女は、鏡台の椅子を引くと、一歩前に踏み出した。

二十六 肩甲骨の女

いつの頃だろうか。いや、生まれる前、正確には、お母さんのお腹の中にいる頃からだ。あたしは思い出そうとする。人は、三歳までの記憶は覚えていないと言う。もちろん、自分が三歳であるという認識もない。

両親が写してくれた写真を見て、初めて、自分の小さい頃のことを思い出すのだ。いや、思い出すのじゃない。自分なのだけれど、自分じゃない子どもが、そこに写されているというのが実感だ。その写真に写っている子どもが、現在の自分と結びつきそうで、結び付かない。確かに、顔は似ている。今の顔の面影はある。

父親が大切に保管している毎年の年賀はがきの家族写真を開くと、自分の顔が、毎年写り、連続していることがわかるので、確かに、昔の自分も、今の自分も、自分なのだろうと思う。問題は、存在の話ではない。肩甲骨のことだ。

あたしの肩甲骨は他の人に比べて、異様に引っ込む。日常生活で支障を来すことはないのだけれど、ガクツと音がするぐらいに引っ込むのだ。それも右肩甲骨だけでなく、左肩甲骨も、だ。もちろん、肩一方だけ、引っ込むのは気持ちが悪い。どうせならば、両方がいい。左右対象に、バランス良く引っ込む。シンメトリーだからこそ、体も心も安定するのだ。

両親は、あたしの左右の肩甲骨が極端に落ち込むのを見て、「天使の羽よ。きっと幸せになるよ」と誉めてくれるけれど、鏡で背中を見ると、がくがくとしており、このまま体に変形していきそうで不安な気持ちになる。

普段は服を着ているので、他人に天使の羽根を見せることはない。けれど、学生の頃は、水泳の授業がいやだった。泳ぐことは苦手じゃなかった。どちらかと言えば、得意だった。同級生よりは、泳ぐのが速かった。けれど、速いからこそ、「あなたはいいよね。背中に羽が生えているから」と友だちからからかわれた。友だちにしたら冗談のつもりだろうが、本人にとっては心が痛く傷ついた。その一言で友人関係を断ったこともあった。

羽じゃない。羽だったら、空を飛べるはずだ。空を飛べない羽は羽じゃない。小学生の頃、一度、近所のお山の公園（公園内に盛り土があり、展望台があったことから、友だち同士、お山の公園と呼んでいた）に行き、山に登った。

山と言っても五メートルぐらいの高台で、盛り土には芝生が植えていたが、ところどころ、赤土が見えていた。あたしは、一番なだらかな裾を探すと、手を広げ駆けだした。

ブーン。口からはプロペラの音を出した。風を受ける。スピードが出る。滑走路を半分過ぎた。空を飛べるのか。かけ足の一瞬だけ、宙に浮かんだような気がしたが、すぐに地面に引き戻された。斜の滑走路を過ぎ、公園のちょうど真ん中で、あたしは立ち止まった。やっぱり、飛べなかった。

それ以来、飛ぶことも、人に素肌の背中を見せることはなかった。万が一、背中が見られる場合には、背中に垂直板が背負っているように意識して、決して、肩甲骨が羽に見えないよう、用心

した。

人前では、背中を見せないものの、あたしは、自分の天使の羽は気に行っていた。毎朝、鏡の前で、肩甲骨を後ろに下げ、羽のように見せた。空を飛べなくても、人生の空は飛ぶことができるんじゃないか。幸せがどこからかやってくるのを待つんじゃなく、天使の羽で、幸せを掴みに行くことができるんじゃないか。そう思った。

今日もまた、朝、歯磨きやうがい、洗顔をするように、あたしは、肩甲骨を後ろに引き、天使の羽がきちんと付いているかどうかを確認した。

二十七 ミニトマトを栽培する女

まだかな。まだかな。

キャサリンは窓際の鉢をのぞく。

あっ、そうだ。水を遣らなくっちゃ。

台所に行き、ガラスコップに溢れるほど水を注ぐ。こぼれないように運ぶ。ガラスコップの海に波紋が生じる。

おととと。

キャサリンは、水がこぼれないように、また、こぼれても鉢に水が遣れるように、手を伸ばす。おととと、だなんて、恥ずかしい。おやし用語だ。ギャルが、しかも外国人のキャサリンが使う言葉じゃない。いや、ギャルなんて言葉も、ミイラ化して、古墳の貝塚の中に放り込まれている。

いや、それよりも、目の前のコップだ。手だけをいくら伸ばしても水はこぼれる。手と同時に足も一歩前を出す。

おととと。

また、死語が出た。それよりも、左足が先だ。グラスは、それほど早くに鉢に水を遣りたいのか、後ろを振り返らずに、前へ前へと進む。その意思是正しい。納得する。理解できる。

だけど、手だけが体じゃない。頭も胴体も足も一体だ。手が早いと言うけれど、体も一緒に着いて行かなければ、体ごと倒れてしまう。そう、本体転倒だ。そうなると、鉢に水を遣るという初期の目的が達成できなくなる。それこそ、本末転倒だ。

キャサリンは、右手の意思を尊重するために、ろくろ手に甘んじようとした。この結果、右腕と左腕の長さが異なり、アンシンメトリーの体になっても構わない。キャサリンは重大な意思決定をした。

そのお陰なのか、右手はぐいぐいと伸び、グラスが直角から八十九度、七十八度、六十七度と傾いていくにも関わらず、中の水が、自らの新たなる受け入れ先である新天地を求めて、そう、グラスの中の水にとって、今までいたところには既に関心がなく、これから住む場所が重要であり、新天地を求めて西へ、西へと進んでいく開拓者のように、飛び出した。その先は、一旦、収まる場所がない空中であったが、東の間の散歩を楽しんだ後、植木鉢の中に無事着地した。

グラスが傾くのに比例して、キャサリンの体も支えを失い、傾いたものの、無事、グラスの水が

植木鉢の中にかかるのを確認すると、グラスを胸に抱き、右肩からくるりと受け身をとって一回転した。キャサリンも、グラスも、植木鉢も、全員が無事だった。めでたし、めでたし、だ。

それでは、キャサリンが怪我することも厭わずに大切にしている植木鉢の正体を明かそう。植木鉢にはトマトが植えられている。植木鉢にトマトだって？そんなに小さな場所に、植えることが出来るのか、L寸の体なのに、無理やりS寸のTシャツを身に付けているあなたのことだろう、と、突っ込みが入りそうだが、安心して欲しい。トマトはトマトでも、ミニトマトだ。

ミニトマトだから、トマトの実は、キャサリンのおちよぼ口に入るか入らないかの大きさだが、背丈は軽く一メートル近くにまで伸び、キャサリンの座高を遥かに越えている。嬉しいことだ。ここでは、別に、キャサリンの座高とミニトマトの背丈を比較しようという意図はない。キャサリンが、大切に、大事に、そして、キャサリンの美のために、ミニトマトを育てていることを知ってもらいたいだけである。

「早く咲け咲け。トマトの花」

キャサリンは、まだ緑色の花びらをやさしく撫でた。

「早くなれなれ。トマトの実」

今度は、開いた花房を指で軽く弾いて受粉・着果を促した。

「早く色づけ。トマトの実」

キャサリンは、まだ、緑色で固くひきしまった実を、見つめられて恥ずかしさのあまり頬が赤くなるまで、見続けた。

キャサリンの必死の思いが伝わったのか、トマトの実は赤く色づいた。軽くつまんだだけで、手のひらの上で転がった。白魚のような指先で赤い真珠の実を掴むと、水道水で軽くすすぎ、そのまま口の中に放り込んだ。

口の中で転がるトマトの実。すぐには齧らない。二か月以上も、大切に育てたトマトだ。キャサリンは、これまでの苦労をすべてねぎらうかのように、口の中全体でトマトを転がした。口の中は、キャサリンの代表として、しっかりとトマトを堪能した。十分満足したので、次は、歯にバトンタッチした。

ガリリと齧る。中から甘い溶液が舌に広がり、しなやかな感触が歯に伝わる。

これだ。キャサリンはこの感触を、数か月の間、昼もなく、夜もなく、ずっと待っていたのだ。言葉が口から飛び出した。

「ああ。じゅうーしー」

宝石は、キャサリンの口の中を花火のように彩っただけでなく、爪先に、髪の毛に、腋の下に、膝の裏に、足の親指など、体全身に広がった。キャサリンは、ミニトマトの花火で全身を覆われたのだった。

赤い爆弾は、キャサリンの心を戦慄させた。キャサリンは、自分がどんどんときれいになっていっていると感じた。体育座りにしゃがみ込むと、膝頭に口を付けるほど膝を抱き、丸くなって、自分もトマトの実になろうとした。もちろん、緑の帽子を被り、赤いTシャツを着て。

「かゆい。かゆい」

女は右腕を背中に回し、背中を爪で搔く。だが、どこがかゆいかわからない。かゆみを覚える場所を搔く。ごりごりがいいのか。ごしごしがいいのか。はてまた、ぽりぽりがいいのか、ざきざきがいいかわからない。

搔き方の方法が問題ではない。かゆみさえとればいいのだ。じゃあ、かゆみはとれるのか、かゆみが背中にひっついてのではない。千社札やお守りのように、かゆみが張り付いているわけでもない。はてまた、幽霊や祟りが取りついているなんて信じられない。

じゃあ、かゆみってなんだ。背中がかゆいかゆいと叫んでいるのか。それとも、頭が、脳が、勝手に、かゆいかゆいと叫んでいるのか。怪我をしたら痛みが走る。皮膚が破れている。その箇所から黴菌が体の中に侵入する。体を守るために、脳に痛みが走るのだ。

だが、かゆみはどうだ。確かに、蚊に刺された後は赤く盛り上がっている。だから、かゆい。かゆみで、蚊がこの部屋に生息していることを知る。蚊は病原菌を持っている。人間の血と引き換えに、病原菌を注入する。なんて、不届きな奴だ、なんて、ふらちな奴だ。ただで、無料で、何の依頼もなく、理解も得られないまま吸血するにも関わらず、なおかつ、病原菌までプレゼントするなんて。女はこの理不尽な行為および蚊の存在に怒りを生じている。

だが、今は、蚊に刺されたわけではない。それでも、かゆい。右腕を背中に回しても届かない場所がある。かゆい。かゆい。左手を下から背中に回す。おっ。やったぞ。右手と左手が届く。女の背中新幹線が開通した。ウレシイ。だけど、かゆい。下から回した左手も届かない箇所がある。どうしてもかゆい。だけど、かけない。手が届かない。どうしたらいい。

女は立ち上がった。手は元の位置に戻す。女が住んでいるのは、マンションの一LDK。鉄骨造りだ。ベッドとテレビとキッチン、トイレ併設のユニットバスがあるだけだ。木造の家じゃないので、柱はない。

女は窓の方に行く。窓ガラスの縁に背中を押しあてる。背中がまっすぐになる。背筋が伸びる。角が背中にあたる。膝を曲げる。背中が下がる。かゆいところに届いた。膝を伸ばした。もう一度、ドアの縁がかゆいところを通過した。気持ちがいい。

これはやめられない。女は上下しだした。かゆみが失せる。誰かに見られたら恥ずかしい光景かもしれないが、今の、女にとっては恥ずかしさよりもかゆみをとることが先決だ。

ふうう。気持ちよさが勝った。いや、本当に気持ちいいのだ。

確かに、かゆいところをかけば、かゆみはなくなる。だけど、その後は、かゆみじゃなく、肌がこすれた、皮膚が破壊された痛みが生じる。痛みを感じるために、ただ単に、かゆみを感じないだけだ。砂糖よりも、塩味が勝っているだけだ。

この痛みの背後には、かゆみが残っている。その証拠に、かいた後をしばらくの間、ほおっておくと、再び、かゆくなってくるからだ。痛みの地層にかゆみの地層があり、マグマの噴火のごとく、かゆみが上昇して、皮膚にあらわれてくるのだ。

永遠のかゆみとの戦い。このままではいけない。一晩中、ガラス窓の縁に背中をくっつけて、搔くわけにはいかない。だからと言って、何もしなければ、かゆくて仕方がない。一晩中、眠れな

いかもしれない。

こうなれば、眠ってしまうまで、背中をかきつづけるしかない。かゆみを取れば、あたしは何とかなる。あたしは美しくなれる。マイナスをゼロにただけでも、人生はきっと豊かになれるはずだ。

女は意を決し、窓ガラスの縁に背中を当て、膝の屈伸運動をしながら、背中をこすり続けた。窓の外からこの部屋を眺めると、カーテン越しに人が上下する影が写るものの、道行く人は誰も気づかなかった。

二十九 グラス一杯の水を飲む女

あたしは外を見ていた。窓ガラス越しに見える外の世界だ。まず、空だ。空は青い。雲ひとつない。晴れ渡っている。光に当たる。熱い。今は朝。これから日が高くなるにつれて、日差しは強くなり、気温も上昇する。

あたしは、庭に目を転じた。そこには、芝生が生えた庭と、低木の植栽がある。あたしは、じっと目を凝らす。太陽が当たっている箇所と日陰の部分。太陽が昇ってくるに従い、日陰は小さくなる。太陽の熱で、地面の水分が、蒸気となって上昇しているはずだ。植物たちは、命の水を求めて、太陽よりも早く、負けまいと水を吸収しようとする。折角、吸収した水も、植物の本体に日が照らされれば、いくら強固な樹皮で覆われていようとも、光合成をおこなう葉からは、呼吸とともに、水分が蒸発する。

早く、早く。今、根が地面深くに、決して届くことのない水脈に辿り着いた、根が、ゆっくりと、計画的に、枯渇しないように、水を吸収する。そうだ。あたしもだ。

あたしは、今は、太陽に直接は照らされてはいない。部屋の灯りもつけていない。だが、太陽の光の粒子は、庭へ、窓ガラスへ、そして、あたしがいる部屋に静かに侵入してくる。防ぐ手はある。カーテンを閉めればいい。だけど、あたしは、光が侵入する方をよしとする。光との共存だ。

あたしは、台所に立った。グラスを持った。水道水を注ぐ。勢いの余り、水は縁をこぼれ落ちる。そのまま手が濡れる。ひんやりとした触感。こぼれた水は掻き集められない。だが、もったいなくはない。皮膚からも、水を吸収すればいいのだ。あたしは、水に自らの指を委ねる。

次は、口だ。喉が渴いた。指からの水の侵入を待っている暇はない。手に水を吸収させながらも、コップに口を付ける。一気に飲み干せ。水は、口の中を溢れ、喉をごくごく鳴らしながら通過し、食道、胃、小腸、そして、体全体に行き渡る。内からのプール現象だ。

あたしは手を回す。クロールだ。足はバタ足だ。手を横に掻く。平泳ぎだ。足がカエルになった。上を向いた。太陽がまぶしい。先ほど見た空と同じだ。青い。肩をゆっくりと回す。右肩。左肩。次は、背泳ぎだ。体がぐるっと回転する。鼻に水が入らないように、逆に、鼻から息を出す。足は上に向いて水を打つ。

ぶくぶくぶく。胃の中から泡が出る。コップ一杯の水の中で、わたしは、太平洋の泳ぎを体験した。島影も、船影もない。遙か彼方に水平線が見えるだけだ。本当は、胃壁があるのだろうか

、今のミクロの粒子となったあたしには、何も見えない。

ああ、一杯の水よ。あたしの母となれ。

あたしは、ひからびた胃から、全身の皮膚から、みずみずしさを取り戻した。

三十 植え替えする女

やっと終わった。郁子は額に滲みでた汗を右腕の手首で拭った。汗はしたたり落ちるほどではなかった。明け方には、雷が鳴り響き、機関銃のような雨粒の玉が、家の屋根やガラス、庭や道路を叩きつけた。風も三者の仲間に入りたいのか、遅れを取り戻さんばかりに激しく吹いた。

ガラス窓の大きく揺れる音で、郁子は何回も、何回も目を覚ました。午前七時過ぎにはやっと雨がやみ、雷の音は消え、空には青空が垣間見え、光が差し出した。

郁子はベツツドから起き上がると窓ガラス越しに外の風景を見た。バルコニーには、いくつかの鉢が置いてあった。ミニトマトに、パセリに、名前を忘れてしまった観葉植物の鉢が置いてある。いずれも、強風と雨脚の強い雨にバランスを崩され、鉢ごと倒れていた。郁子は空を見上げる。

もう、雨は降っていない、風は吹いていないの確認すると、ベランダに出て、鉢を起こした。うなだれていた花や茎たちは、ようやく自信を取り戻し、天に向かって真っすぐに立ち上がった。その鉢の中に、ひとつだけ、黄色い花が合った。花は、まだ、鉢に植えられておらず、買ってきたままの黒いビニールのカップのままだった。

忘れていた。その花は、一週間前の日曜日に、近くの生協で、買い物の際に購入したものだ。本当ならば、すぐに鉢に植えかえなければならなかったが、つい、その後、夕食の準備をしたり、お風呂に入ったり、洗濯をしたりする中で、鉢に植え替えするのを忘れてしまっていたのだ。それから一週間が過ぎていた。

今から、花を植えかえよう。

郁子は戸を開けた。素足でベランダに出た。ベランダの隅には、これまで花を買ってきては枯らした花の鉢だけが、墓標のように積み重なっている。その数は、五個。いずれは新しい住居者が現れ、いつかは陽に照らされるであることを願い、待ち続けている。

その横には、同じくスーパーで買った野菜と花の土のビニール袋が口を開けることなく、銃殺刑で倒れた被害者のように、がくんと体を折り曲げている。

郁子は、五個の墓標の中から、白いプラスチックの鉢を選び、野菜と花の土を持って、ベランダの真ん中に置いた。その横には、狭いながらも楽しい我が家だけれど、やはり、広いお家がうれしいわと言わんばかりの黄色い花が、安アパートの中で、生きながらえていた。

郁子は、鉢に土を半分程度入れ、黒いビニールカップを外側から掴んだ両手の指で、親指、人差し指、中指、薬指、小指と順番に押し上げた。その度に、土とビニールカップの間に隙間ができた。それが何回か繰り返されると、花と土は、ビニールカップの殻を抜き出て、新しい住居を探すヤドカリとなった。

新しいお家にどうぞ。

郁子は、墓標からゆりかごに変身した鉢に花を移し替えた。根を深く植え、根もとをしっかりと押さえ、上から更に土を加えた。白い粒の肥料を四個から五個ばらまき、鉢の底から溢れんばかりに水を遣った。花の引越しは終わった。花は、まだ、新しい家がなじんでいないのか、恥ずかしそうにうなだれている。

おしまい。

郁子は立ち上がった。そして、あることを思いついた。まだ、空の鉢に、残っている土を全部入れた。そして、土に向かって、親指から始まり、人差し指、中指と次々と指を土の中に突っ込んで行く。右手が終わると、次は、左手だった。左手の小指を突き刺した。そして、抜いた。郁子の両手の指は、全て黒い土がついた。

両手についた土を見る郁子。そして、もう一度、右手の人差し指を鉢に突き指した。目をつぶる。耳をすます。鼻から息をゆっくりと長く吸い、口から三回に分けて、息を吐いた。風がベランダを通り過ぎると、郁子の右腕の産毛がそよいだ。

あたしは、花だ、あたしは、植物だ。あたしは、生き物だ。

郁子は人差し指から土の湿り気を感じた。黒い土からは、土の栄養分を目で感じた。鼻からは土の匂いを嗅いだ。

郁子は、長い間、植木鉢に指を突っ込んだままであった。そして、そのままとうとうし始めた。

郁子の隣では、黄色い花がすくっと立っていた。

三十一 風鈴をつける女

ちりりりん。ちりりりりん。

風に吹かれて風鈴が鳴る。女が窓際に寄る。一個の風鈴を眺めている。

ちり、ちりん。今度は、別の風鈴だ。その風鈴は、さっき鳴った風鈴のすぐ隣に並んで窓際のカーテンレールに吊るされている。

キン、キン、キン。今度は。また、別の音だ。

風鈴は、カーテンレールに十個ほど並んでいる。それぞれが、風が部屋に入ってくると同時に、また、別々に鳴り響く。風の合唱団だ。風は、風鈴の鈴を動かすとともに、窓際に立つ女の頬を撫でた。女の肩まで伸びた髪の毛がカーテンのように揺れ、女の顔を露わにする。女はにこっと微笑んだ。風が女の心まで届いたのだ。

まだかな。女が呟いた。その声は、風鈴の音に消されて、はっきりとは聞き取れなかった。

まだ、来ないかな。今度は、ちょうど、風が風状態の時に言葉が発せられたので、一言一句聞こえた。

女は誰かを待っている。誰を待っているのか。

女は、半間で、高さは一間ある収納ドアを開けた。上段に女の服が吊るされ、下段には、三段の収納ボックスが二つ並べられていた。全て、女のTシャツや下着類など、服類が詰まっていた。いや、一つの段だけ違うものが見えた。女はそのボックスを引きだした。

あった。あった。

女がボックスから取り出したのは、風鈴だった。それも一個や二個ではない。数十個もあった。風鈴には、金魚やカエル、しょうぶの花、また、子や丑などの干支の絵の江戸風鈴を始め、ちょうちょうやとんぼ、金色堂など、南部鉄器の風鈴、その他にも、大谷焼や砥部焼など、地域特産の焼き物の風鈴もあった。さながら、ボックスの中は風鈴市のようなであった。

女の商売は、風鈴屋なのか。だが、三十前の女はそうは見えなかった。風鈴を集めるのが趣味なのか。趣味が転じただけなのか。いや、本当は、女の欲望が変形したのだ。代償措置となっただけなのだ。

女は男を待っていた。男には妻子があった。いわゆる不倫である。「ふりん」を待つために「ふうりん」を好むのは冗談のようかもしれない。だが、女にとっては、男を待つしかなかった。待つ身は辛い。辛さを半減するため、ある日、風鈴を吊った。

ちりりんと風鈴が鳴った。

あら、風ね。女が窓際に行き、二階の部屋から下を覗く。そこには、男がいた。今、階段を上がろうとしていたところであった。男が見上げる。女と目が合った。男が少年の顔のように笑った。女も少女のようにはにかんだ。大きく手を振る男、手首だけで振り返す女。男は階段に消えた。女は玄関のドアを開けに行った。

それ以来、女は、風鈴を眺めていた。風鈴が男を連れてくるものだと信じ込んでいた。信じ込まざるを得なかった。

ひとつでは足りないと思ったのか、多く吊れば、男が頻繁に訪れると思ったのか、最初の一個が二個に、三個に、四個にと徐々に増え、今では、カーテンレールに隙間がないほど吊るされた、だが、風鈴の数が増えれば増えるほど、少年の顔がこの部屋を訪れる回数が減った。

女は風鈴をひとつずつ吊ってゆこうとする。だが、カーテンレールには、既に、風鈴は一杯の状態だ。もう、吊れない。女が来て欲しい時に来ない男と同じだ。そう、つれないのだ。

女は部屋全体を見回す。部屋は窓が一面。後は、白いビニールクロスが二面と、玄関やトイレが付いたユニットバスがある一面。後は天井と床だ。直方体の六面体。風が吹いて、風鈴が鳴る場所。それは、天井からぶら下げるしかない。女はテーブルの上に、数あるだけの風鈴を置いた。

ちりりりん。風鈴同士がぶつかり、音が出た。女は手元にある金魚とカエルが描かれた風鈴を右手と左手で持った。お互いをぶつけ合う。

きききききん。ガラスの風鈴の音がした。ちりりりん。陶器の風鈴の音がした。耳を壊す音と心を癒す音。どちらも、風鈴から出る音だ。女は食堂のテーブルの上にある数多くの風鈴に目をやった。

どれにしようかな。

女がまず選んだのは、開運だるまだった。椅子に上がり、手を伸ばすと天井に届いた。シーリングの横に押しびんでひもを差し、開運だるまを吊った。

女は下から開運だるまを見上げる。開運だるまは居場所を見つけたのか、開放感なのか、ちりりんと喜びの声を鳴らした。女は窓を見る。窓はガラス戸が開いていた。カーテンがステップを踏んでいる。カーテンまで、風鈴が増えるのを喜んでいるのだ。

開運だものね。

女は、りんご風鈴、みかん風鈴、金魚風鈴、カエル風鈴、鉄器製の風鈴、陶器製の風鈴を次々と天井に吊って行った。さながら、川崎大師の風鈴市だ。

天井に吊るされた風鈴が、夕方から吹いてきた風で揺れ、夕食前の賑やかな宴を演じている。女も素直にうれしいと思った、ひとりだけ楽しかった。部屋はまだ灯りを点けていなかった。外から漏れてくる光が天井の風鈴を照らした。女の部屋が星空ではなく、風鈴空で輝いた。

ひよっとしたら。

女は風が男の化身ではないかと願った。急いで、台所に行くと、保管していたスーパーのビニール袋を窓際まで持ってきた、袋を窓の外で広げ、風が入ると急いで口を縛った。次々と、ビニール袋の風船を作った。部屋の中には、夜の空気で満たされた風船が所狭しと転がった。

女は、そのビニール袋が破れ、男の精霊が出てきて、男の体になることを期待して、一晩中、眺め続けた。

あたしは大きな木の下にいた。木は、市の銘木に指定されているケヤキだった。幹は、あたしが手を広げても抱えきれないほどの太さだ。細く、胸も薄いあたしが木を抱くと、木の樹皮と一体化する。それぐらい、あたしは細かった。医者からは摂食障害と診断された。

だけど、あたし自身は、障害とは思っていない。食べたくないから食べない。やせたいからやせる。無理に食べれば、口から吐き出した。お腹にとどまれば、下剤を飲んで、全て洗い流した。それほど、あたしは、食べ物に気を配った。

そんなあたしが、今、木にもたれかかっている。木は樹齢二百年を超えている。木の幹には、ところどころ樹皮がはがれるとともに、苔がむしっていた。

うわっ。あたしは自分でも驚くくらいの声を上げた。背中を木に預け、ふと首を傾けるとセミがいた。薄茶色のセロファンみたいなセミ。そう、セミの抜け殻だ。ちょうど、あたしの目の横の高さだ。

セミの抜け殻は、手や足のギザギザの引っ掛かりを利用して、しっかりと幹に密着していた。幼虫のまま地中で七年間成長し、地上に出て来て成虫となり、短い命を終える。

あたしはセミの真似をして、幹にしがみついた。だが、体は地面にずれ下がった。生きているあたしはずれ落ちるのに、セミは、抜け殻になってまでも木に引っ付いている。抜け殻の生に対する強い執着心なのか。

本体のセミはどこへいったんだろう。ここは神社だ。あたしが佇んでいる木以外にも多くの木がある。そのどこからか、セミの鳴き声が聞こえてくる。

ひょっとしたら、この神社のどこかに本体のセミもいるのかな。

あたしは見上げた。見上げた先は葉。葉、葉だ。折り重なる葉。その隙間から空の一部が見える。いや、葉が空で、空が葉なのかもしれない。ここでは、葉が世界を支配している。

その葉の空からセミの鳴き声が落ちてくる。あたしはセミの鳴き声を聞き分けようとしたものの、葉が重なり合うように、鳴き声もハモっているため、聞き分けられない。どれがどのセミなのか。重なり合う葉を見つめ、重なり合う音を聞いているうちに、あたしは軽いめまいを感じた。このままめまいが続き、神社とセミの迷宮の世界に入り込んで、二度とこの地に帰って来られないのではないか、とさえ感じた。

もう、いや。あたしは目をつぶり、耳をふさぎ、木の根元に座りこんだ。

その時だ。耳をふさいでいるあたしの鼓膜までも突き破ろうとする音が鳴り響いた。あたしは立ち上がり、目を見開き、両耳から手を離れた。

葉の世界を突き破ろうとする光が覆った。稲妻だった。あたしはケヤキの木の下でいたので、直接、稲光は見なかったものの、葉で覆われた暗闇の下でも、周囲は十分に明るく照らされた。

あたしはお腹を押さえた。腹痛ではない。稲妻の子を宿したいと願ったのだ。

稲は、雷で受精し、米を実らせると考えられ、そこから稲妻という言葉が生まれた、という話を聞いたことがある。それ以来、雷には、何かを生み出す力があるのではないかと思うようになった。その思いは日増しに強くなり、雷の音を聞けば、自分が妊娠するのではないか、雷の子、神の子を宿すのではないか、と期待、希望、願望、妄想するようになった。

最初は、雷が鳴れば、部屋に閉じこもり、雷の光も見ないように、音も聞こえないように、どちらかと言えば、雷から逃げようと、逃れようという気持ちであった。だが、人間は不思議なもので、雷の光から、雷の音から、逃れようとすればするほど、いつも雷のことが気になり、空を見上げたり、用もないのに、街を彷徨ったりした。

今日は、ようやくその機会が来たのだ。あたしは、あてどもない散歩、放浪、逍遥、彷徨を続けているうちに、神社にやってきた。手水で手を洗い、賽銭を投げ入れ、鐘を鳴らし、二礼二拍手一礼し、社殿の裏側の太木に身を潜めたのであった。

きゃあ。また、鳴った。こわい。だけど、この子のためだ。

あたしは、今一度、お腹をさする。もう、雷の子は入ったかな。いや、まだだ。音だけではだめだ。光も入らないと。音と光が受精して初めて、妊娠できるのだ。人間だってひとつの卵子に、数億個の精子が群がるのだ。この程度の数の雷では、あたしは、雷の子を宿せない。だが、あたしは、雷が苦手だ。恐怖だ。それでも、我慢しなければならない。

あたしは、目を瞑り、両耳を押さえながら、再び、座り込んだ。怖いから逃げ出したい気持ちと、このままここに居て雷の子を宿したい気持ちが拮抗する。

周囲がぱあっと、明るくなった。閉じたはずの瞼さえもうっすらと明るくなった。

もうだめ。我慢できない。鳴り響く音や夜空どころか世界さえも切り裂かんばかりの稲妻に、雷の子を宿したい気持ちは耐えられなくなった。

もう、家に帰ろう。だけど、雨は降りしきっている。傘はない。どこにも行けない。どこにも逃れられない。このまま、まさか、一晩中、このケヤキの下で過ごすのか。

そう思った時、閉じられた耳には何も聞えなくなった。閉じられた目は、稲妻が落ちる度じゃなく、常時、明るくなった。

あれ、どうしたのかしら。

あたしは、目を開け、ふさいでいた耳から手を離した。目の前の水溜りには、雨粒の機関銃は打ち止んでいた。

やんでいる。雨はやんでいる。それに、雷も鳴っていない。

あたしは立ち上がった。空を見上げる、晴天が見える、黒い雲が青く染まっている。もう、晴れたのか、雨はおしまいか。稲妻は鳴らないのか。

早く、帰ろう。

あたしは、サンダルのまま、水たまりを避け、ペタペタと地面に痕跡を残しながら走り出した。もうすぐ、家だ。アパートの二階の部屋が見える。

その時だ。再び、開いていた青空が黒く閉じられ、地面に粒粒の穴を開けんかばかりの雨が降り出した。

疑似の好天。騙された。そんな言葉があたしの脳裏をよぎった。瞬間、黒い空も吹き飛んだ。黄金色だけの虹、いや稲妻が世界を覆った。そいて、激しい音。

きゃあ。あたしはその場で蹲った。あたしの目の前の電信柱に稲妻が落ちた。

それから三か月。

あたしはお腹をさすっている。あたしは、稲妻の子を宿した。いや、宿したはずだ。その証拠に、お腹は、以前に比べて大きくせりだしている。あたしは、それ以来、お腹の雷の赤ちゃんのため、朝、昼、晩と食事を取り続けている。もう、吐くことはない。摂食障害はやはり障害ではなかった。いや、障害を乗り越えたのだ。

体重は以前に比べて、十キロも太った。

三十三 ハーブを植える女

痛い。京子は叫んだ。京子は道路に転んでいた。転ぶだなんて、いつ以来だろうか。小学生の頃は、公園で、友だちと鬼ごっこやかくれんぼなど遊んでいて、追いかけてごっこになり、何かの拍子に躓いて転んだりしたものだ。それ以外にも、小学校の一年生の頃、自転車に乗る練習で、補助輪がふたつからひとつになり、ひとつがゼロになり、補助輪の数が減るのに比例して、自転車で転ぶ回数が増えたこともあった。

それがどうしたことか、今頃、転ぶだなんて。今、京子は四十代だ。転んだ理由はわからない。気が付いた時には、転んでいた。足腰が弱ったのか。体幹がしっかりとしていないので、ふらついたのか。左足が右足の先を踏んだことに気づかないで、右足を持ち上げようとしたため、バランスを崩して転んだのか。

それとも、右足だけが後ろ足のことなど気にせずに前に、前に進み、左足は左足で、前に進む右足のことなど考えずに、ここが自分の居場所だと、じっとしていたために、股関節がどんどん開いていき、とうとう我慢しきれずに、転んだのか。

転んだ原因を突きとめようと、記憶を甦らそうとするものの、自分の足にも関わらず、脳は少しも足の事を覚えていない。京子は立ち上がろうとした。

「どっこいしょ」待て待て、掛け声を上げないと起きあがれないのか。それに、どっこいしょ、だなんて、うら若き（四十歳）少女が出す声じゃない。だけど、意識はいくら若者ぶっても、体は、筋肉は、ついて来ない。仕方がない。

「どっこいしょ」もう一度、声を上げた。

京子は、何とか、重力が一直線にかかるよう、地面に対し、垂直に体を立て直した。両手で膝についた泥をはらう。その時だ。

「汚い」京子は叫んだ。

京子の右一指し指の爪の中に、泥が入り込んでいた。親指を駆使して、何とか爪の間に入った泥を取ろうとしたが取れない。人差し指を口に咥える。

じやりじやり。口の中でじやりが自己主張している。

ペッペ。

京子は、口の中から泥を吐き出す。それでも、爪の奥の方に、泥が付着している。泥は、自己主張が強いのだ。

京子は、家に帰ると、すぐさま、手洗い場に行った。石鹸をよくつけ、手を何回もこねくり回し、水道水で、手が野球のグラブになるほど洗った。だが、指の先の泥は取れない。爪の先は黒い

ままだ。もう一度、洗う。まだ取れない。

いー。となる京子。爪切りを持ち出し、泥を除去するため爪を切る。爪の白い部分がなくなり、肌色の部分に到達した。それでも、泥はこびりついたままだ。京子は、なおも爪を切る。痛い。肉まで切ってしまった。深爪だ。それでも、奥の方が黒いままだ。もう一度、手を洗う。だが、やはり黒さは薄くなるものの、肌の色には戻らない。

他人から、自己主張が強く、自意識過剰、プライドが高い、ひとりよがり、と言われることがあるが、自分の爪の泥の抵抗には、さすがの京子もあきらめた。ふてくされ、手を洗いすぎて疲れたので、ソファーにごろんと横たわった。

うつらうつらの夢心地。だが、顔が熱い。傾いた太陽の光が京子の顔を照らしている。この部屋の中でのスポットライトを浴びた京子だけが浮かび上がっている。自己顕示欲の塊の京子としては、主役になるのはいいけれど、あまりの暑さに目を覚ました。まだ、眠い。顔を洗うために、洗面所に行く。いぎ、水を出し、顔を洗おうとする。

あれ？京子の指から緑が生えていた。そう、緑の葉っぱだ。あの泥がとれなかった指の先から、芽が出ているのだ。

そんな馬鹿な。

京子は顔を洗った。その拍子に指の先の葉が落ちた。京子は、それを指でつまみ、何回か、水でゆすぐと、口に入れた。甘くて、にがい。まるで、ハーブだ。食べられないことはない。こんなことなら、もう少し大きくなるまで待っていたほうがよかった。

翌日の朝。再び、爪の先から、双葉が出ていた。今度は、大事に育てようとした。

運よくか、都合良くか、結果としてか、京子は、会社などのホームページやブログなどを作成したり、改修したりする業務を行っている。自宅でやれる仕事だ。人と合うことは少ない。これも、自己顕示欲の強さのせいだ。自宅のパソコンで仕事をしながら、ちょっとひと息つきたい時に、窓から指を出して、葉が光合成できるよう葉を日光浴させた。

数日後。指先の双葉は、茎が伸び、四葉、八葉、十六葉と、倍々ゲームで増えていった。指輪をしている友人はいるが、爪の先にハーブを栽培している人はいない。自分だけだ。これぐらい自己顕示欲を満たされるものはない。京子はなんだか、嬉しくなった。

ハーブの葉の大きさからすると、そろそろ、摘み取りしてもいい頃だが、なんだか惜しいような気がする。だが、爪の先のハーブは、伸びるに従って、パソコンのキーボタンを打つのに邪魔になってきた。このままでは仕事ができない。おまんまの食い上げだ。最近太り気味なので、やせたい気持ちがあるが、いつ生えてくるかわからない、爪の先のハーブだけに食糧をたよるわけにもいかない。

京子は泣く泣く、指の先のハーブを収穫した。その時、京子は思った。指の先で、ハーブが栽培できるのならば、おへそだっていいのではないか。おへそならば、成長しても、パソコンを打つのに邪魔にならない。それに、おへそは、適当なくぼみがあって、湿り気もある。ひよっとしたら・・・。

京子は一縷の望み（そんなことに、望みなんかをかけなくてもいいが）をかけて、指の先をおへそに突っ込んだ。手を抜く。おへそを改めてじっと見ると、黒い粒子が付着している。それが、

泥なのか、おへそのごまなのか、判別はできなかった。

翌日。京子は、おそるおそる、寝巻をめくり、お腹を出した。予想どうりだ。想定内だ。おへそから、緑色の幼葉が二枚生えていた。成功だ。

京子は、それ以来、口の中や、鼻の中、耳の穴、あそこの穴、そして、体中の皮膚の汗腺にも、人差し指を突っ込み、撫でくり回し、ハーブの種を植え付けようとした。おかげで、今、京子は、体中から、ハーブが生えている。野菜度百パーセントの体だ。見た目も涼しく、いつでも野菜が食べられる。一挙両得だ。

「こんなにも、あたしはきれいで、美味しいのか」

京子は、これから満足して生きていけそうな気がした。

三十四 紙を集める女

「あら、こんなところにも」女は、道路にしゃがみ込むと紙を拾った。紙といっても、ガムを包装している銀紙である。

「あら、こんなところにも」次に拾ったのは、タバコの箱だった。他にも、パソコン教室のチラシやコンタクトレンズの割引券、三人打ちマージャンのチラシなども拾った。

これらのチラシは、ポケットティッシュと一緒に配られるけれど、中から広告のチラシだけが抜かれ、道路に捨てられる運命にある。本体のティッシュは、所有者のポケットまたはハンドバッグの中に入れられる。

女のA3用紙大の袋が、拾った紙でほぼ満杯の状態だ。女はポケットから携帯電話を取り出し、時間を確認する。今は、朝の六時半だ。

「もういいか」女は、誰に話すわけでもなく呟くと、元来た道に向かって戻って行った。ほぼ一時間。女は、毎朝、散歩を兼ね、袋を下げて、道を歩く。女が住んでいるのは、単身者用のアパートで、メイン道路から、歩いて五分行の場所にある。通りからひとつ中に入っているだけで、車は走らず、人通りも少なく、閑静な佇まいになっている。

「今日も、袋が一杯だわ」

女は部屋に戻ると、袋から道路に落ちていた紙を取り出す。牛乳の蓋、ポッキーの箱、近所のラーメン屋が一周年を迎え、百円割引きとなるサービスチケットが付いたチラシ、資源ごみで集められなかったのか、逃げ出したのか、くしゃくしゃによじれた一面だけの新聞紙、などなどだ。

女は、集めた紙の皺をきれいに伸ばし、A4大の大きさに折り畳み、重ねる。A4よりも小さいのは、新聞紙などに挟み込む。一定の量がたまると、資源ごみの日に、集積場に運んだ。

それで、何がどうなるわけではなかった。だけど、何かに取りつかれたように、女は紙を、紙の素材を集めては、束にして、重さを図り、日記帳に記録をつけると、昨日よりもよく集まったのだ、もっと拾う場所を変えてみようかななどと、自己評価するのだった。

いつもどおり、朝、散歩がてらに紙を集めようとした女。残念ながら、今日はどういう訳か、紙が落ちていなかった。ポテトチップスの袋や、空き缶やたばこの吸い殻は落ちてはいたが、紙や紙類は落ちていなかった。女が拾うのは紙類だけで、その他のゴミには目もくれなかった。紙以

外のゴミで、街が汚れようと関心がなかった。

「今日の収穫はゼロ」

女は、さっさと散歩をやめた。散歩を始める際には、健康を維持・向上することが目的であったが、今は、紙を拾うのが目的になっていた。目的が達成しない以上、やる気はおこらない。体も意志に従った。

女は、自宅に戻ってくると、玄関先のポストから新聞を取り出した。その時に、ポストの下にチラシが落ちていることに気づいた。朝、出る時は落ちていなかったはずだ。いや、気づかなかっただけかもしれない。

「どうせ、スーパーのチラシだろう」女はチラシを拾って手に取った。

チラシには、「紙は、あなたの前にいる」というメッセージが掲載されていた。家の近所に最近建てられた新興教会館の信者獲得のためのPRチラシだった。

「紙は、神の誤植だわ。ばっかみたい」女は、紙一枚と少ないけれど、本日の収穫が得られたことに満足し、玄関のドアを開けた。

今日も、また、美しい一日が始まる。

三十五 ヒッグス粒子の女

「また、通った」あたしは、手のひらを空にかざす。宇宙からは素粒子がこの地球に、この日本に、この四国に、この香川に、この高松に、降って来ているのだ。降っていると言っても、あまりにも粒子が小さいため、あたしの体には当たって跳ね返らずに、すり抜けるのだ。

痛い。とは感じない。だけど、痛い。

不思議な感触、感覚だ。

本当に、あたしの体よりも、小さい物質があつて、体をすり抜けているのか。

光でさえ、あたしの体を通り抜けはできずに、影をつくるのに。

そう、光でさえ、物質なのだ。どんな強風も、どんな微風も、あたしを通り抜けることはできない。

それなのに、素粒子は、やすやすと、あたしが感じることもなく、あたしを貫いている。貫かれたにも関わらず、痛さを感じず、生きているあたし。

あたしは物質だけど、網目状の生き物なのだ。隙間が至る所にあるのだ。だけど、あたしの目はその隙間を見つけることができない。

だが、感じる。今、素粒子が通った。はずだ。

素粒子は頭を貫き、前頭葉を貫き、喉を通り、肺を突き破り、心臓を射ぬき、お腹をよじり、アキレス腱を蹴り飛ばし、親指の爪から抜け出ていった。

「もう、どうなってもいい」

あたしは大の字に寝ころんだ。いや、大の字じゃない。磔の姿勢だ。宇宙から襲ってくる粒子に、あたしは、なすすべもなく、攻撃を受けていた。逃れられない人生ならば、全てを受け入れた方がいい。

目をつぶる。五感を集中させる。宇宙からの粒子の音が聞こえる。

あたしの体に突き刺さり、素通りする。

これまでのあたしの人生と同じだ。父や母、兄弟、姉妹、友人、男たち、あたしと関わる全ての人があたしをすり抜けていった。あたしは、いつも取り残されていた。

今さら、宇宙からの粒子がどうした。どうなるんだ。それよりも、粒子があたしをすり抜けてくれることで、いらない、余分な物を取り除いてくれているかもしれない。

「そうか」

あたしは立ち上がった。上からか、下からか、右横からか左横からか来る粒子に、体の全てをさらした。

粒子が通り過ぎる度に、あたしは美しくなる。なれるはずだ。でも、ならなくてもいい。

三十六 欠番

三十七 汗をかく女

優子はランニングをしている。額から、脇の下から、顎の下から、腰背筋から、股間から、膝裏から、汗がにじみ出る。それだけでは、とどまらない。体中の穴から汗を出す。口からも、日陰にいるにも関わらず、体中が毛で覆われた犬のように、口から舌を出してもなおかつ、汗を出す。ついでに、目からも涙汗を出す。もう、発汗できるところない。

優子は次の手を考えた。次の一手であり、最初の一步だ。ひよっとしたら千日手になるかもしれない。

自宅に帰って来た優子は、ランニングシャツ、ランニングパンツ、ショーツ、ランニング用のブラジャーを外す。そして、風呂場に掛け込む。真っ裸のまま、風呂桶を取り出す。誰も見ていない。何が恥ずかしいんだ。だからこそ、恥ずかしいのかもしれない。

桶の上で、汗みどろの、汗で重みを増した、汗で別の形に変形した、汗で自分の匂いを全て吸い取った、ランニングシャツ、ランニングパンツ、ショーツ、ランニング用のブラジャーをひとつずつ、絞っていく。汗がしたたり落ちた。一粒、二粒、三粒、四粒。

ランニングシャツたちは、自らの血を絞り出すように汗を出した。何のためなのか。自らが軽くなるためなのか。自らの匂いを帳消しにするためなのか。そう。その目的さえもしらずに、優子は、ランニングシャツたちを絞っていく。一滴、二滴とプラスチックの桶に汗がたまっていく。

。

「面白いわ」

優子は呟いた。汗を絞ることにだけに集中する優子。今の優子の目的は、ランニングシャツたちの汗を絞ることであった。

終わった。優子の手はパンパンだ。物を持つ力さえない。二の腕、一の腕からも、汗が再び、ほとぼしり、優子はその汗さえも桶に集めた。

本当に終わった。優子は、裸のまま、風呂場の床に座りこんだ。窓から心地よい風が優子の裸の体にまとわりついた。汗はもう出ない。代わりに、塩の結晶が毛穴から噴き出た。優子は、手のひらを舐めた。塩辛い。でも、甘い。これが、私なんだ。

プラスチックの桶の中を見た。溶液だ。正確には、優子の汗だ。今さっきまで、優子の体の中にいた仲間だ。同僚だ。双子だ。もうひとつの私。

優子は自分の汗を眺めていた。突然、桶の中がぐるぐると渦巻き始めた。まさか。洗濯機でもないのに。優子は疲れから来る妄想だと思った。一旦、目を瞑る。そして、ゆっくりと目を開く。

桶の中には、水の精が立っていた。わずか五センチ足らずの汗の精。姿は優子にうりふたつだった。頭の形も、なで肩も、こぶりの乳房も、最近、ややまるみを帯び突き出たお腹も、うりふたつだった。リトル優子。優子が、汗に向かって、リトルというのは、少し憚られた。でも、リ

トル優子には間違いない。

「リトル優子」

優子は汗の精に声を掛けた。水人形のリトル優子。体は水分だが、その水分は全て本体の優子の所有物だ。いや、正確には所有物だった。

リトル優子が全身を揺する。しゃべられないため、ボディランゲージで返事をしてくれた。

可愛い。汗臭くなんかない。優子は、手を伸ばし、リトル優子の頭を撫でた。リトル優子は、優子の汗からできているけれど、優子のエキスなのだ。そのエキスを、優子は否定できない。

優子は、リトル優子を手のひらに乗せ、風呂場からリビングに戻ると、リトル優子をテーブルの上に置き、しばらくの間、頬杖をついて眺めていた。眺めれば眺めるほど、愛おしくなってきた。それに応えるかのように、リトル優子も、優子の前で、新体操なのか、サーカスなのかわからないけれど、演技を披露してくれた。

日が差してきた。西日だ。優子の住んでいる部屋には、西日が強く差し込んでくるのだった。優子とリトル優子を照らす。リトル優子が身悶えしだした。

「いけない」

優子は、急いでカーテンを閉じようとした。だが、遅かった。リトル優子は、一滴のエキスも残さず、テーブルの上から消えていた。

「大丈夫。助けてあげる」

優子は、リトル優子が消えたテーブルの上に立ち上がり、空気を鼻で、口で吸いこんだ。

「お陰で、助かったわ。また、会えるわね」

優子には、音はしなかったけれど、リトル優子の声が聞えたような気がした。

「また、明日から、トレーニングを積まなくっちゃ」

優子は、大きく背伸びをした。

三十八 ウォークマンレディ

女が部屋の中で蹲り、じっとしている。目をつぶっている。部屋の中は真っ暗だ。耳を押さえている。耳が痛いのか。そうじゃない。女の両耳には線のついた耳栓が押し込められている。いや、耳栓じゃない。イヤホンだ。手には名刺大の機械を持っている。

じっとした女にウォークマン。言葉の意味からは、似合いそうで似合わない。だが、これはジョークじゃない。事実だ。女は音楽に聴き入っている。

どんな音楽なのか。音楽のジャンルは何か。民謡、童謡、演歌、フォークソング、ロック、レゲエ、ジャズ、クラシックのうち、どの音楽なのか。それとも全く異なる、世界でただひとつの音楽なのか。

耳を澄ませてみるものの、女の耳にイヤホンがきちんと入っているため、音漏れがない。女が頭を上下に振っている。何かを口ずさんでいる。そうだ。音楽に合わせて、リズムをとっているのだ。喜んでいるのか、哀しんでいるのか、女の表情だけではわからない。

もう、かれこれ一時間が過ぎ、二時間が過ぎ、三時間が過ぎようとしている。だが、女は相変わ

らず、イヤホンをつけたままのシッティングレディだ。

指が動いた。女が人差し指で、膝を叩いている。ドラムを叩いているつもりなのか。左手を差し出し、右手をお腹のあたりに持ってくると、上下しだした。ギターをひいているのだ。口が動き出した。声は出ていない。口パクだ。唇の動きを観察する。

あたし・は・あたし・・・・。

女の口から読みとれるのはそれだけだ。後は小さくなり、口を閉ざした。

突然、女が目を見開き、イヤホンを外した。そして立ち上がると、部屋から出ていった。本当の、ウォークレディになるために。

後に残されたウォークマン。電源はオフの状態のままだった。音楽は流れていなかった。

三十九 爪を染める女

あたしはじっと指を見つめていた。両手の指を開いた。細長い指があたしは自慢だった。友だちからも、あなたは手の指が白くて、きゃしゃで、きれいね、と誉められた。誉められれば誉められるほど、あたしは自分の指を好きになった。

今度は、両足の指も見つめた。手の指と違って、足の指はずんぐりむっくりだった。それでも、友だちからは、あなたは足の指もきれいねと誉められた。友だちだけじゃない。エステの人からも、全身マッサージの際、手も足も指がきれいですねと誉められた。

エステの場合、お金を払っているのだから、おせいじに決まっているだろうけど、でも、おせいじにしても、誉められるのは嬉しかった。だが、それだけではもの足りなかった。もう少し、この指に何かをしたかった。しなやかで、きゃしゃな指だ。もうこれ以上、何も付け加えることはない。そうだ。あった。爪だ。爪にアクセントを付けよう。

それから、あたしは、爪に絵を描き始めた。ちょっとしたアクセサリーも引つけた。両手、両足の指全てだ。二十本の指の爪全てを彩ろうとした。

まず、左手の親指。日本の国旗を描いた。今年は、オリンピックの年だ。自国の選手を、自国を応援するつもりで描いた。次に、人差し指。ここにビッグ ベン（今は、呼び方が変更になっているらしい）を描いた。有名なイギリスの時計台だ。オリンピックの開催地はイギリス。ロンドンだ。開催に当たって、開催地に敬意を表するため描いた。

次は、中指。タワーの絵だ。今年完成した東京スカイツリーを描いた。今も行列ができるほど、多くの人が訪れている。薬指に絵を描くことでタワーに登った気分になれた。

薬指。そこには、赤十字を描いた。地震や台風、土砂崩れ、火事、交通事故など、不幸に苦しむ人に向け、追悼・鎮魂の意味を込めたメッセージだ。

最後に、小指。小指には何を描こうか。あたしは考える。四本の指の絵は、すぐに思いついたのに、あとひとつがなかなか思い浮かばない。そうだ、自分の似顔絵だ。

あたしは手鏡を取り出し、小指の爪に自分の顔を描いた。顔といっても、目、鼻、口に似せて、ポツン・ポツンと印を置くだけだ。似顔絵なんてものじゃない。それでも、似顔絵だと思えば似顔絵らしく見える。

できた。あたしは、左手を顔の上に上げて、よく観察した。残りの指はどうしよう。簡単なのはどれだろう。自己主張できるのはどれだろう。やはり、似顔絵だ。点点だけで、いいからだ。それでも、何とか顔らしく見える。できた。十六個の爪全てに、自分の似顔絵を描いた。両手、両足を突き出す。十六個が似顔絵で、残り四個が違うのは、少し変だ。バランスが悪い。あたしは、最初の四個も似顔絵に塗り替えた。

あたしは、椅子に座り、両手・両足を突き出した。全ての爪があたしの顔だった。それが全て、こちらを向いている。一對二十の御対面。思わず笑った。これが、にらめっこだったら、あたしの負けだ。それに、相手はあたしが描いた絵だ。笑うことはない。いや、笑っているようにも見える。

このまま街に出掛けよう。あたしには、あたしの応援団がついているのだから怖いものはない。だけど、なかなか踏ん切りがつかなかった。恥ずかしいのだ。何、あれ変よと、指を差されたり、噂されるのがいやだった。

でも、誰も、あたしのことなんか気にしていないし、もし、両手、両足の指の爪に、似顔絵を描いているのに気がついても、どうせ、すぐに忘れるのに決まっている。しかし、もう一歩が踏み出せないあたし。

そうだ。あたしはTシャツを胸の上までめくった。お腹がでてきた。讃岐の山の、ぽっこりお山だ。その中心部がおへそだ。あたしは、へそを中心に絵を描いた。もちろん、自分の似顔絵だ。爪に描くよりは大きい。ぽっこり部分全体に描いた。似ている。爪ではわからなかったが、今度は、描いた面積も広いので、眉から始まり、顔の輪郭、耳までも描けた。お腹を突き出し、鏡台の前に座っているあたし。

ははははは。笑った。大いに笑った。もう、大丈夫。あたしには、もう一人、いや二十一人のあたしがっているのだから。

さあ、行こう。あたしはTシャツを下ろし、靴を掃き、玄関のドアを開けた。

四十 子を抱く女

由美子は抱いていた。まあ、可愛い子。由美子が胸に抱いていたのは赤い野菜。人参だった。

あたしの可愛い赤ちゃん。にんじん子。よしよしよし、泣くのはおよし。

由美子は胸に人参を抱いている。

どう、お乳はいらぬの。にんじん子は答えぬ。

じゃあ、いいわ。そのままいぬさい。

由美子は人参をまな板の上に置くと、冷蔵庫から、今度は、ごぼうを取り出した。

さあ、おなかはすいていない。由美子はごぼうを持ち上げると胸に抱いた。

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこよ。お腹いっぱいなの？じゃあ、遊んであげる。

高い、高い、ばあ。高い、高い、ばあ。

由美子はごぼうを両手で持ち、自分の頭の上に持ち上げる。

高い、高い、ばあ。高い、高い、ばあ。

ごぼうは返事をしない。代わりに、急に運動したものだから、由美子の方が、はあ、はあ、はあ
と荒い息使いをする。由美子は、愛おしさのあまり、はあの次にごぼ子、はあの次にごぼ子、と
ごぼうを抱きながら、叫び続ける。

こんなにも大事にしながら、ごぼうからは何の愛想もないものだから、由美子はふてくされて
しまった。

もういい。由美子のごぼうをまな板の上に置き、再び冷蔵庫を開いた。今度、取り出したのは、
豚肉のパック。由美子は、トレイごと豚肉を持つと頭の上に抱く。

高い、高い、ばあ、ぶた子。高い、高い、ばあ、ぶた子。

豚肉のパックは、切り身のままぶた子と呼ばれ、ぺらぺらとするものの、返事はない。

由美子は、豚肉のパックもまな板の上に置いた。次に取り出したのは、ネギ。由美子はネギ子と
名付け、豆腐もとうふ子と呼んだ。

まな板の上には、人参を始め、ごぼう、豚肉、ネギ、豆腐が並んだ。由美子は、自分の言うこと
を聞かない、にんじん子、ごぼ子、ぶた子、ねぎ子、次々と切り刻み、炒め、水を入れ、とうふ
子にもおしおきを加え、みそ子で味を調えた。

できた。由美子とん汁を食べた、由美子の、まな子も、はな子も、くち子も、みみ子も、かん
じんかなめのした子も鼓を打ちながら、満足した。

食べ終わった後、由美子は、膨れ上がって、讃岐のお山のようなお腹を撫でながら、
あたしの、おなかこ。早く出て来い。と願った。

四十一 袋をかぶる女

女は、今、さっき買ってきたコンビニの袋からカップラーメンを取り出した。お腹が空いている訳ではない。女が欲しかったのは、この袋だ。このビニール袋だ。でも、これだけじゃ足りない。コンビニの前で落ちていたビニール袋もポケットの中から取り出した。駐車場の車止めの場所に落ちていた袋だ。何かを購入した客が、中身だけ取って、袋は捨てたのであろう。

女は、いかにも、善意の美化清掃員、環境指導員のごとく振舞って、ビニール袋を拾うと、コンビニの前のゴミ箱に捨てるふりをして、ポケットにねじ込んだ。

ふと気になって、顔を見上げた。すると、ガラス越しに、店の従業員が頭を下げてくれた。やっぱり、見てたんだ。よかった。ビニール袋を拾ったまま、コンビニを立ち去れば、女はビニール袋を拾う女として、呼ばれることになる。コンビニだけでなく、街中に、女はビニール袋女として有名になり、必要でもないのに関わらず、次々と玄関前にビニール袋が放られる運命となる。そうなれば、大量なビニール袋をどうすればいいんだ。途方に暮れてしまう。

以前、ある作家が、メロンパンが好きだと雑誌で書いたら、全国のファンからそれぞれの地域の様々なメロンパンが送られてきて、嬉しいけれど困った、というコラムを読んだことがある。

女だって、どうせならビニール袋よりも、メロンパンの方がいいし、イチゴのショートケーキの方がよりいいし、茄子のからし付けだっていいし、やっぱり、わずか二十平方センチメートルの面積しかないけれど、世界中を飛び回れるジュータンではならぬお札の方がいい。ないものねだりしても仕方がない。女は、従業員に向かって、にこっとあいそ笑いをした。これで、ゴミ袋拾いの女というレッテルを張られないで済む。

女はそそくさとコンビニを後にすると、自宅に戻って来た。戦利品の公開。まずは、カップラーメンの袋。そして、駐車場に落ちていたビニール袋が、ひとつ、ふたつ、あれ、みつつもある。人目を気にしながら拾えるだけ拾ったので、数までは数えていなかったのだ。

全部で四枚。これだけでは足りない。女は、タンスを開けた。その中には、これまで集めてきた戦利品が詰め込まれている。開けた途端、おもちゃのちゃちゃちゃ状態だ。狭い空間に押し込まれていたために、我先に、飛び出して来る。飛び出す絵本は楽しいけれど、飛び出すビニール袋だなんて、しみったれた。と、言いながら、それを集めているのは、女自身なのだが。

床に広がったビニール袋。女は、適当な大きさの袋を手取る。まずは、右足に履かす。次に、左足だ。次に、左手。その次が右手、何だか、両手がドラえもんの手になったみたいだ。最後に、これまでよりは大きなビニール袋を取り出すと頭から被った。これで、女自身が、全て、ビニール袋に覆われたことになる。もちろん、プクツと突き出た丘陵地帯のお腹は別だが。

ビニール袋で覆われた女。なんて、素晴らしい言葉の響きだ。女は息を吸う。ビニール袋が女の顔にへばりつく。少し、強引なキスだ。リードしてくれるのはいいけれど、無理やりは止めて欲しい。それに、これじゃあ、息ができない。両手両足のビニール袋も皮膚呼吸をしているため、白く湯気が立ってきた。

早くしないと。女の目は白目となって来た。

もう少しだ。女は、歩く。一步、二歩、三歩と。そして、おもむろに、日本の国旗を取り出すと、テーブルの上に建てた。国旗は、風がないため、うなだれているが、ささやかな存在感は示している。

この美しくて、汚いわたしの部屋。

女は人類として、初めて、無酸素状態で、自分の部屋に立った。女の一步は小さい、また、他人にとっては、無意味な一步であった。

四十二 体中を伸ばす女

あたしはベランダを見ていた。そこには朝顔が植えられていた。朝顔は蔓を棒に巻き付け、伸びていた。先端は、新たな探索地点を探しているのか、今だ、停止中。

そうだ。あたしは、指で一本髪を掴むと上に伸ばす。マンガのキャラクターじゃないけれど、髪が一本だけ立つ。手を離す。ほんのわずか、ストップウォッチで計っても一秒未満、髪の毛が直立不動になった。だが、気合不足なのか、体幹がしっかりとしていないのか、すぐに倒れてしまう。そう、倒れてもいいんだ。

あたしは、髪を立たせることはあきらめて、今度は下に伸ばすことにした。髪の毛を一本引っ張る。伸びろ、伸びろ。あたしが念ずる。しかし、髪の毛は伸びない。もう少しだ。皮膚が盛り上がってくる。

プツン。一瞬の痛み。そして、人差し指と親指には一本の髪の毛がある。

抜けちゃった。あたしは抜けた髪の毛をじっと見つめる。このまま、吹いて飛ばせば、もうひとりのあたしが現れるんじゃないかと淡い期待をするが、それは物語のお話。抜けた髪の毛はあたしの髪の毛だが、もう、あたしには戻れない。また、別の存在だ。そして、お払い箱行きとなる。

短かったお別れね。あたしは抜けた髪の毛を部屋の片隅にあるゴミ箱に放り込んだ。

じゃあ、これだ。あたしは、今度は手を上げる。指の先まで伸ばす。指の先の爪には朝顔の花を描いた。どんどん伸びろ。あたしの体よ、どんどん伸びろ。

立ち上がったあたし。つま先立ちになるあたし。もうすぐだ。もうすぐ天井に届け。

あたしは精一杯背を伸ばす。だが、ここまで。アキレス腱が悲鳴をあげ、ふくらはぎがプルプルと震えている。このままじゃあ、倒れてしまう。あたしは、元の位置に座った。

物理的に伸ばせないのならば・・・。

あたしはベッドに横たわった。そして、目を瞑った。あたしの頭の中には、あたしの体が大の字に横たわっている。それを見つめるあたし。

ほら。あたしを見つめるあたしが声を掛けた。横たわったあたしの髪の毛が伸びていく。横へ横へと伸びていく。髪の毛だけじゃない。右手も、左手も、右足も、左足も指ごとに朝顔の蔓のように伸びていく。頭の中にあたしの蔓が伸び、髪の毛や右手の指が伸びて、絡まり合う。

蔓は頭の中だけでは物足りないのか、満足できないのか、あたしの空想の中では収まりきれずに、想像の壁を突き破り、大脳新皮質、大脳古皮質、大脳旧皮質、脳幹、視床下部まで食い込む。あたしの蔓は、脳を突破し、本体であるあたしの目や鼻や耳など外部器官だけでなく、心臓や胃、腸など内臓にまで、触手を伸ばす。体全身を蔓で覆われたあたし。これで、満足。満足なの？自問自答を繰り返す。蔓は葉をつけ、つぼみを付け、花が満開となり、種をつけた。その頃になると、蔓は全て枯れ、種だけが残った。あたしは、自分自身の種を集めるとブルーベリージャムの空きビンに入れた。あたしの種。あたしだけの種。大事に、大事に育てよう。

四十三 着ぐるみの女

暑い、熱い、厚い。

いずれの言葉も、今のエンゼルにとっては当てはまる言葉だった。額から汗。その汗が折角描いた切れ長の眉毛を消し、頬紅に一筋の川の流れを描き、鼻からぐるりと曲線を描き、上塗りで朱を全面に押し出した唇のがさついた本性を露わにした。

だから、いやだったんだ。

今さら後悔しても仕方がない。でも、一日一万円のアルバイト料に魅かれたのは事実だ。

本当に、大丈夫？

商店街のおじさんが心配してくれた。

チラシ配り仕事もあるんだけど・・・。

チラシ配りになると半額の五千円。着ぐるみに寄って来た子どもや子どもを追い掛けてきた母親や父親に商店街の販売チラシを配る仕事だ。着ぐるみとチラシ配りは一对の仕事だ。どうせ、同じ時間帯で仕事をするのならば、お金が高い方がいい。

やります。大丈夫です。体力だけは自信があるんです。

エンゼルはこう言い切ったものの、本当は、体力はなかった。昔、中学生の頃は、陸上部の選手だったが、それから、本格的なスポーツは十数年間やっていない。中学生の頃の体力が今も残っているはずがない。それに、人は、六十兆個の細胞でできているが、毎日三億個の細胞が死に、新しく生まれているらしい。計算すれば、二十日で、全く別人に生まれ変わることになる。

エンゼルはもはや中学生ではない。その計算からすれば、中学生の頃に、陸上の部活をやって一か月もたたないうちに、陸上選手ではなくなってしまっていたことになる。

筋力の細胞は消えてしまったが、記憶の細胞だけは、まだ、頭の中に残っていたのだろうか。その記憶細胞が、エンゼルに、大丈夫です。体力だけは自信があるんです。と、言わしめたのだ。

無責任な発言をした記憶細胞に責任を取ってもらおうにも、その記憶細胞すら、新しく細胞が生まれ変わり、記憶にございませぬ、と返事が返ってきそうだ。冗談にもならない。

「たまときちゃん！」

だれかがエンゼルの着ぐるみにぶつかって来た。多分子どもだろう。エンゼルのお腹辺りで感触

を得た。エンゼルの着ていた着ぐるみは商店街のマスコットキャラクターだ。最近、にわかにはブームになっている、ゆるキャラのひとつだ。卵をモチーフにしている。

エンゼルの体型も卵型であり、エンゼルとしては親しみを感じるものの、他人から同じ雰囲気です、と若干、婉曲的な言い回しで、真実を突かれると、顔がむっとして、心が乱れるのは何故だろうか。

自分の事は自分が一番よく知っているからこそ、敢えて、指摘されたくないのだ、その癖、肌がきめ細やかですね、なんて、自分が気づいていないような事を誉めてもらおうと、意外にそうなんだと納得してしまうのは、何故だろう。

そんなことよりも、今は、体当たりを食らわしてきた子どもだ。子どもは、こちらが受け身のままでいると、凶に乗って、やりたい放題の状態になる。

「たまときちゃん！」

別の物体が背中の方にぶつかってきた。本人にすれば、抱きしめにきたのだろうが、中に入っているエンゼルにしてみれば、悪意ある攻撃にしか思えない。だが、これもバイト料のうちに含まれる。我慢しなければ。

エンゼルは、体を後ろに向け、サービス精神を發揮して、ぶつかってきた子どもを抱きしめようとした。

「こわい」

子どもが泣きだした。母親がすぐに寄って来て、泣いている子どもを抱くと、「ごめんなさいね」と謝りながら、立ち去っていく。

「いえ、いえ、どういたしまして」と応えたいが、着ぐるみがしゃべるわけにはいかない。それに、「こわい」と言われて、どういたしましてと返事するのも可笑しい話だ。喜んで抱きついてきたくせに、こちらが好意に応えようとしたら、悪意を持って背かれる。

だけど、エンゼルは本当の事を言えば、着ぐるみを着ることは嬉しいのだ。先ほどの話があったように、エンゼルの体型は卵型だ。現在の、異性からのいわゆるもてる、人気があるのは、胸が膨らみ、ウエストが引っ込み、お尻が小さい体型である。

一昔、それが、どのくらいの昔なのかはわからないが、全体的に、体型がふっくらとしていた方がもてていた。もてると言うよりも、それだけ栄養が満ちていると言うことは、経済的に裕福であることを象徴していたのだ。もてるが、金銭を、土地を、食糧を持っているということだったのだ。

だが、時代は変わった。この国では、食べ物が満ち溢れ、過剰とまで言える社会だ。体型への好みに、エンゼルが遅れたのか、時代がエンゼルに断りもなく勝手に先に進んだのかはわからない。

ただ、言えることは、エンゼルはふっくらとした卵体型に不満であり、これまでも痩身になるために、運動や食事療法、健康食品、はてまた、エステなどに挑戦したが、ことごとく失敗に終わった。失敗と言うよりも、エンゼル自身が、心の底から痩身を願っていたかどうかさえも疑わしい。

それ以来、自宅に籠ること、いわゆる出不精、別名、でぶ症に拍車がかかった。だが、でぶを維

持するためにも、この国では金が必要だ。やせっぽちになるにも、金が必要だ。矛盾のようで、金筋が通ったこの社会。

エンゼルは何かを維持するために仕事を探した。見つけた仕事が着ぐるみのバイトだった。意外にも、着ぐるみは、時代に逆行してか、それとも更に一歩進んでいるのか、ふっくらとした体型が多い。着ぐるみは、中に人が入るのだから、人間よりも大きいのはわかるが、アニメの登場人物たちは、先ほど、今の時代を反映してか、顔が小さく、胸が大きく、ウエストは細く、ヒップも小さい。よく見ると、体型的には、アンバランスなどだが、このアンバランスさが魅力なのか。

それに比べて、エンゼルの身に付ける着ぐるみは、胸は大きく、お腹は出て、お尻も大きい。いわゆる釣鐘型だ。昔、お寺には多くの参拝客があったというから、この商店街にも多くのお客さんを訪れてもらうためには、同様に、釣鐘型が望ましいのかもしれない。着ぐるみひとつで、様々な文化が語れるのは、脳が刺激される。その刺激がより一層強くなった。

「たまときちゃん！」

エンゼルは数人の子どもたちに取り囲まれた。この着ぐるみには、頭に網掛け状の部分があり、正面は見ることができるが、灯台下暗しで、足元は全く見えない。いわば、遙か未来は見えても、目の前の現実が見えない仕組みとなっている。今のエンゼルと同じだ。

「あそぼ！」「あそぼ！」

エンゼルの周りをこどもたちが押し合いへしあいする。前からも後ろからも横からも圧力がかかる。波状攻撃だ。エンゼルは前へも後ろへも横へも一歩も動けない。こう着状態だ。

待って。待って。

エンゼルは心の中で叫ぶが、こどもたちはエンゼルの心など知らない。己の欲望のためにただ突き進むだけだ。

ああああああ。

着ぐるみのバランスが崩れた。エンゼルの後ろにいた子どもが急に持ち場を離れたからだ。もちろん、こどもと約束なんかはしていない。これまで、こどもたちの四方から押す力の微妙なバランスで、現在位置に留まっていた着ぐるみだが、パワーバランスが崩れたことで、後ろにのけぞったのだ。一旦、崩れた体勢には、着ぐるみと本人の体重が加わり、立て直されることなく、着ぐるみは地面に倒れた。その時、着ぐるみの頭の部分がはずれ、エンゼルの頭が、顔が世間にさらされた。

「何だ、人間か」「いこ、いこ」

さっきまで着ぐるみを取り囲んでいたこどもたちは、一斉に、倒れたままのエンゼルをほったまま、その場から立ち去った。

「大丈夫かい」

商店街の理事長が慌てて駆け寄って、ひとりでは立ち上がれないエンゼルとその着ぐるみを起こしてくれた。

「すみません」

エンゼルはやっと立ち上がると、「あれ、頭は？」と着ぐるみの頭を探した。

「本当に、最近の子どもは、無茶をやりたい放題だ。親も黙って見ているだけで、誰一人として止めようとしなない」

理事長がぶつぶつと怒っている。

エンゼルは、頭をもう一度被り直した。

着ぐるみを被っているのも私。被っていないのも私。両方とも私なのだ。

エンゼルは、当分の間、この着ぐるみを被るアルバイトを続けようと思った。

四十四 ちょこちょこトンネルの女

まただ。

女の目の前に突然、トンネルが現れた。もう何回目になるのだろうか。ゴーという音がして、目の前が真っ暗になると、女はトンネルの中にいるのだ。何も見えない。聞えるのは女が通る音だけ。女は車に乗っているのだろうか。電車に乗っているのだろうか。それとも、自転車か。ひょっとしたら、女が動いているのではなく、トンネルが動いているのかもしれない。トンネルが通過しているのだ。

ゴーという音がする以外に何も聞こえない。いや、音はしているのかも知れないが、ゴーという轟音が大きすぎて、他の音が聞こえないのだ。その暗闇の中で、女は立ち止まっている。何の前ぶれなのか、わからない。ただ、しばらくすると、暗闇の目が慣れてくるのか、ぼんやりとだがトンネルの先が明るく見えてくる。このトンネルは長いのか、短いのかもわからない。

女は、突然、椅子に座っている時や歩いている時、食事している時、友人とおしゃべりしている時に、トンネルの中に入る。いや、女がトンネルの中に入ると言うよりも、トンネルの方が、向こうからやってくると言った方がいい。いや。訂正する。トンネルがやってくるのではなく、トンネルが突然上からか横からか、下からか、どこかからかはわからないが現れ、女を、女の体全体を覆ってしまうのだ。気が付けば、女はトンネルの中にいた。

その時、女が話をしていた友人はどこに行ってしまったのだろうか。食べかけたとんかつの半切れは、まだ山盛りだったキャベツと一緒に、どこに消えてしまったのだろうか。飲食店の従業員は、きちんとラップをして、女が再び、トンネルを抜け出した時に、残りを出してくれるのだろうか。

そんな心配をしている間に、トンネルは消えて、女は、公園にひとりで佇んでいる。椅子に座り、ひなたぼっこしている。足元にはハトがいた。ポケットをまさぐる。何故だか、ポップコーンがあった。ポップコーンを二、三個指で掴むと、アンダースローで、ふわりとハトにむかって投げた。

ポップコーンは空を飛ぶのがいやなのか、空中に留まらずに、すぐに地面に落ち、転がった。オリンピックの体操選手のような、十点満点の完全着地はできなかった。もちろん、完全着地をポップコーンが望んでいるかどうかはわからないけれど。

ハトは首をクイと横に向け、ポップコーンの位置を確かめると、千鳥足ならぬハト足ですたすたと近づき、ついばんだ。その間も、ハト目がどこに焦点をあてているのか、女にはわから

ない。ポップコーンを食べ終えたハトは、女の足下に近づいてくるが、餌をねだろうという素振りはない。あるから食べただけで、なければそれでいいというような態度だ。決して、頭を下げたり、羽を羽ばたかせたり、尾を振ったりはしない。

相変わらず、全方位外交のように、どこを見ているのかわからない目を最大限に生かして、首を右や左にくいぐいと動かしている。

もっと餌をやろう。女がポケットに手を突っ込んだところで、再び、目の前がトンネル状態になった。ハトさん、ごめんね。女はハトに謝り、別れの言葉を告げたが、ハトには気づいてもらえないだろう。

何回も、何回も、女の前にトンネルが現れては消え、暗闇が明るくなると、女は、また別の場所にいた。非連続の人生。全てがその瞬間だけで存在する人生。女は、最近、これもまたいいのかな、と期待するようになった。

四十五 山中さんという女

「山中さん。診察の時間ですよ」

あたしの座っている後ろから、女性の看護師が声を掛けてきた。あたし鏡越しに笑顔で答えた。

「はい」そして、あたしは鏡の前から立ち上がった。看護師の後ろにから着いていく。ドアの前には、男性の看護師が立っていた。見張り番なのか。知っているようで、知らない顔だ。男の看護師が鍵を取り出し、鉄の扉を開けた。あたしは、看護師に引きつられて出ていく。

「あなたは、誰ですか。そして、何か、自分のことで、何か感じることはありますか？」

「あたしは、山中節子。六十五歳です。何も感じません」

白衣の医師が目の前に座った。あたしに、目を見開かせたり、口を大きく開けたせたり、心音を聞いたり、脈を測ったり、ひととおりの問診をした。

「もう、大丈夫ですよ」

医師は、椅子を回し、自分の机に向かうと、カルテに、問診結果を記し、俯きながら答えた。

「もう、退院しても、いいですよ」

「はい。ありがとうございます」

あたしは、にっこりと答えた。

あたしは二十歳で、病院に入院してから、何十人もの人間を演じ、六十五歳になっていた。（何年間前だが、一年間ほど、一時的に退院し、家族の元で日常生活を過ごしたこともあったが、病気が再発し、入院生活に戻った。いや、あたしは正常だったが、家族があたしはまだ病気だと宣言し。病院に戻したのだった。）、ちょうど今日が、六十五歳の誕生日。世間では、定年退職の歳だ。病院の入院患者にも、定年退院というものがあるかどうかは知らないが、とにかく、あた

しは六十五歳を迎え、病院を退院することになった。けれど、もう、家族は誰一人もいない。だから、帰る場所はない。それでもいい。

女が退院した後、病院の清掃員が女の部屋の掃除にかかろうとした。一見、全てがきれいに片付いていた。

「何、これ」

清掃員はベッドの下に、こなごなに砕け散った鏡を見つけた。

あたしは病院の門を出た。何年ぶりのことだろう。でも、精神は毎日、自由に病院の内外を歩き来していた。

「あーあ、すっきりした」

あたしは、空を掴まんばかりに両手を上げ、アキレス腱を伸ばし、つま先立ちになって、そっと呟いた。

「テクマクマヤコン、テクマクマヤコン。すべてが、あたしでありますように」

あたしは、化粧直し用のコンパクトの鏡を見つめていた。